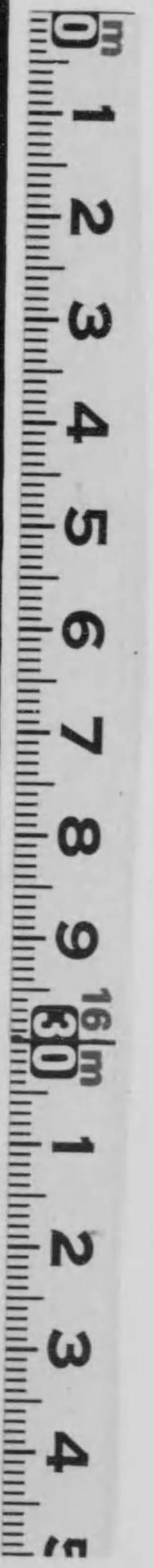


283  
27



始





283-27



高等學校受験秘訣

菊池朝彦 競共著

東京 小西書店發行

大正  
8 4.28  
内交



はしがき

一、 下半全國高等學校評判記は、之れが最初ではない、四十五年に一度發行して、其の後絶版となつて居たのである。

二、 高等學校に關した書物は、その後も何冊か出た。然し多くは興味的文字でそれ以外に出でぬ。今回、實質的なる高等學校の研究と併せて全國高等學校評判記を全然改訂加除したるものを併せて發行する事にした。

三、 此の名は予(出口)にこりて、思ひ出の深い名である。書物の内容は貧しいものであるが、貧しくとも捨て難い。予の著『校歌ローマンス』『學者町學生町』及び『最新式入學案内』と併せて



一讀を希望したい。

四、予もいつか三十に足を踏みかけた。此の書の初版を發行した時に予は二十三の少年であつた。只徒らに年を累ぬる事を思へば、悔恨の情禁じ難いものがある。

五、高等學校時代は、青春の時代である。霸氣横溢の時代である。予は學生諸君が無暗さ場當りをさけて著實なる勉強振りを希望したい。今日までの日本は、『學問のよく出来る人』を希望して來たが、昨日は之れに先立つて『人物の確實な正しい人』を要求して來た。大學出の専門學校出に優る事は勿論であるが、吾々は共に偕に、人格の鍛錬人物の陶冶に勉めねばならない。

六、高等學校受験秘訣は、本書の前半に課したる表題である。

聊か内容としては僭稱であるかも知れない。然し、受験生諸君にとりて、何分の参考になる事を信じて疑はない。

七、よりて、二者を一にして本書を纏めた、興味的に實質的に狙ひ所はそれだ。

八、共に歩まう、共に勉強しよう。先日、未知の高等學校生徒が電車の中で、予の乗車せるを知らずに、頻りに予の名を呼んで語らうものを見た。予は覺えず破顔せざるを得なかつた。兄弟よ共に歩まう。

大正八年春

菊池朝彦  
出口競 共識



# 高等學校受験秘訣

## 目次

はしがき	一
高等學校の研究	一
高等學校は依然人氣者	一
餘裕ある學校の擇び方	五
各高等學校の比較研究	九
入學者の最も多き府縣	三
新設高校と數字的研究	一六



豫定地はどんな土地か……………二〇

學制改革案と高等學校……………二天

各高等學校の學費一覽……………三三

各高等學校入學得點表……………附表

高等學校入學試驗問題……………三七

附 選拔試驗調査委員報告……………五〇

國語漢文……………A委員……………五〇

英語……………B委員……………五五

數學……………C委員……………五九

歴史……………D委員……………六六

物理……………E委員……………七五

力の自覺と諦める人々……………九九

附 高等學校入學志望者中學卒業年度表……………一〇二

大正十二年の高等學校……………一〇八

改訂學校評判記……………一〇九

改訂の序……………一一四

第一高等學校……………一〇九

- 一 一高氣質の變遷……………一一四
- 二 籠城主義搖らぐ……………一二七
- 三 文藝部と運動部……………一二〇
- 四 校長排斥の由來……………一三三



五 所謂一高的生活……………一三六

六 委員千慮の一失……………一三〇

七 暴風の記録破り……………一三三

八 藤村操と一高生……………一三五

九 名物なる記念祭……………一三八

一〇 俗語とその物語……………一四一

一一 教授諸氏評判記……………一四五

一二 賄征伐の今と昔……………一四八

一三 寮舎生活の苦樂……………一五一

一四 校風變遷の徑路……………一五四

一五 今村前教授の話……………一五七

一六 追記……………一六一

第二高等學校……………

一 仙臺市の適應性……………一六三

二 不便利なる學校……………一六八

三 中川氏と三好氏……………一七二

四 兩高校の類似點……………一七四

五 明善寮の生活振……………一七七

六 二高の年中行事……………一八二

七 素人下宿と害毒……………一八六

八 尙志會と其事業……………一八九

九 科學部と運動部……………一九二

一〇 校友會雜誌から……………一九六



一一 鹽竈の端艇競漕……………100  
 一二 うはさの聞き書……………101  
 一三 牛肉屋と汁粉屋……………107

第二高等學校……………111

一 京吉田町の空氣……………111  
 二 折田先生の慈眼……………112  
 三 酒井校長の評判……………113  
 四 野球大會の開催……………115  
 五 寄宿舎と其の歌……………115  
 六 ドクトル虎脚氣……………117  
 七 校長に望むらく……………120

第四高等學校……………121

一 赤い煉瓦の學校……………121  
 二 超然主義の興隆……………123  
 三 牛乳代二錢五厘……………125  
 四 熊先生の無頓着……………126  
 五 遠足部の道案内……………129  
 六 數學は悪くない……………131

第五高等學校……………131

一 本場の三四郎君……………131  
 二 學業の出來榮え……………134  
 三 先生に籠を冠す……………135



- 四 五高の七不思議……………二七
- 五 委員の選挙競争……………三六
- 六 小包と云ふこと……………四〇
- 七 二部の守り本尊……………四一
- 八 校風論大に起る……………四三

第六高等學校……………

二四五

- 一 三十三年の開校……………二四五
- 二 金子校長の評判……………二四七
- 三 娯楽部と其仕事……………二四九
- 四 盛大なる記念祭……………二五一
- 五 宛らの車掌さん……………二五二

第七高等學校造士館……………

二五九

- 六 篤學の満田教授……………二五三
- 七 岡山の心理學者……………二五六
- 一 南國南方の情調……………二五九
- 二 舊城利用の學校……………二六〇
- 三 四月櫻島の快遊……………二六一
- 四 大根攻め豚骨汁……………二六二
- 五 篠原先生の精力……………二六四
- 六 その他の教授連……………二六六
- 七 げむふるの語源……………二六七

第八高等學校……………

二七〇



一 最新建築の學校……………二七〇

二 特待生徒の落第……………二七一

三 選抜試験の効果……………二七四

四 虞美人草の主人……………二七五

五 元氣なる櫻井氏……………二七六

六 八高とその周圍……………二七八

北海道帝大豫科……………二七九

上 北海大學の成立……………二七九

下 豫科と其の生活……………二八三

# 目次終

## 高等學校受験秘訣

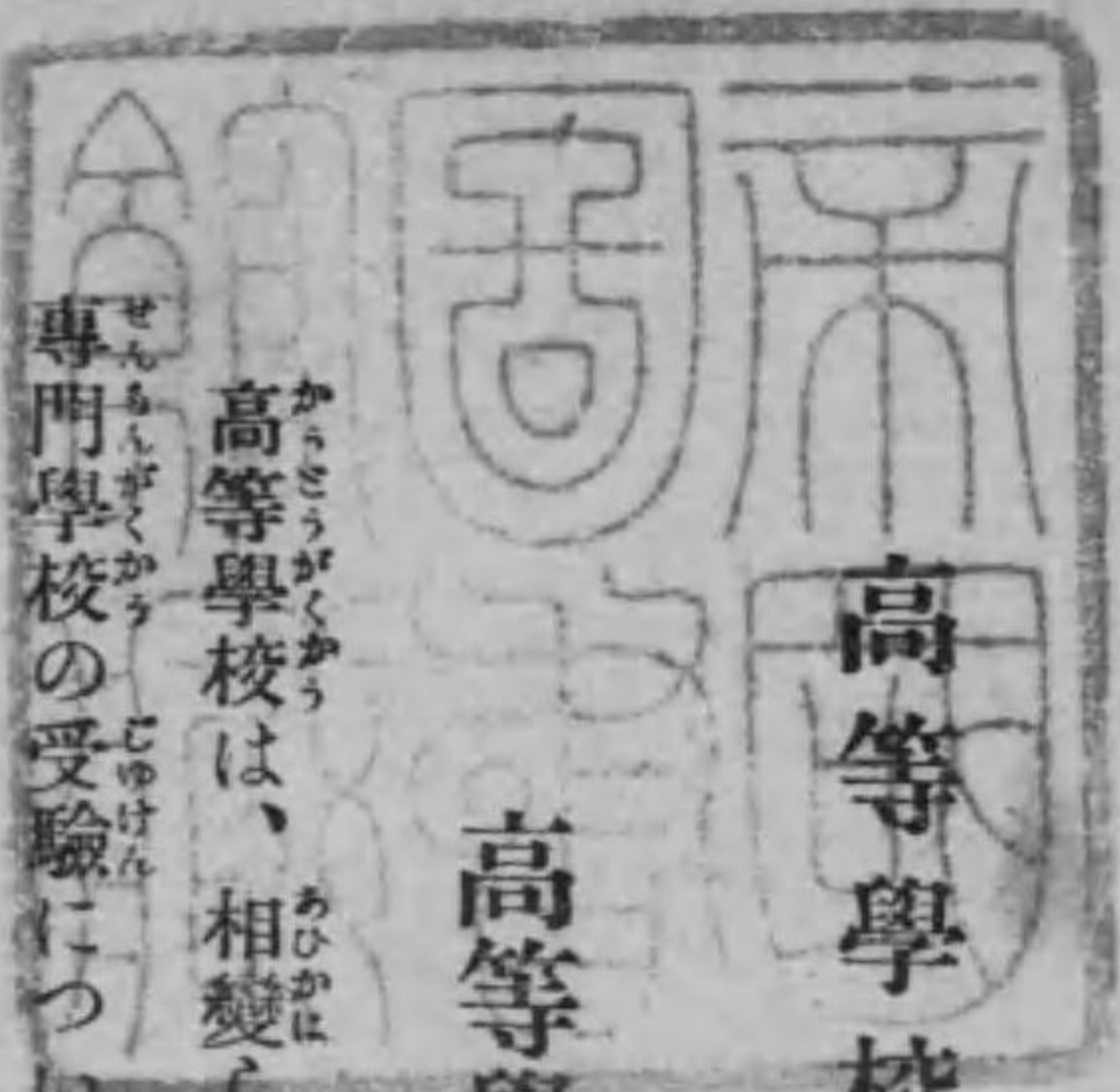
### 高等學校の研究

菊池朝彦擔當

#### 高等學校は依然人氣者

高等學校は、相變らず人氣の焦點である。一つは、中學卒業後、目睫の間に迫つた専門學校の受験については、よく自信のある人でない限りはその一箇年を翌年三月の受験準備として費すのであるから、手見せ腕試しとして受験する人、さうしてあはよくば入學して呉れようと云ふ人の多數を包含して居るものと見ねばならない。最初から高等學校丈けを目標として、一年二年落伍しても懲りすまに豫備校で練り直。

高等學校は依然人氣者





して来る人がその上に加はるのであるから、入學の困難なのは當り前である。  
 入學試験にパスすると云ふ事は、今日の學生にとつては可なりに大きな問題である。  
 入學の困難な事を云へば、ひとり高等學校に限らず、他の官公立専門學校もなかく  
 困難だ。大正七年度に於て最も入學の困難であつたのは、私立學校として優に官公立  
 を凌駕せりとの定評ある明治専門學校であつた。七十一名の採用に對し九百九十五名  
 の希望者があつたのであるから合格者一名に對する競争者は一四・〇一あつた勘定で  
 ある。米澤高工も多かつた。之れは一つは同校が邊域にある關係から入學希望者が割  
 合に少ないことを傳へられて居たので比較的破るに容易なる門戸を指して多數に押し  
 寄せた結果であつたらうと思ふ。七二對六二九、即ち一人對八・九九の競争者であつ  
 た。最も少ない分の、内務省直轄神宮皇學館ですら四二對九六、即ち一名對二・二九  
 であつたのだ。大正六年度各高等學校は二、一八二對一〇、八〇二、つまり一人對四・九  
 五約五人の競争者があると云ふのであつた。多少を論ずれば中軸より以下である。だ

が油断は出来ない。私立學校の方はまだ調査をして見ぬが、之れも年々累積して来る  
 中學卒業生で矢張り官公立學校と似よりの經驗を嘗めて居る事であらう。早稻田大學  
 が豫科入學者に對し成績考査をいふ様になつたのもその半面と見るべきである。  
 高等學校へ進む者に告げる。文部省は七年度に於て四の高等學校新設を發表したが  
 高等學校入學志望者の數から云へば、之れ位では到底足りよう筈はない。現在、日本  
 に於ける中學校の數は東京、廣島、兩高師の附屬中學を併せて三百二十四校、大正七  
 年一月以降四月まで新設せられたるもの府縣立五、私立三八校あるから、結果、日本  
 は三百三十二の中學校をもつ事となり之れに加ふるに中學校の名をもたず其の實質  
 ある學校の卒業生、専門學校入學者檢定試験及第者を併すれば可なりの數に上るので  
 ある。大正五年三月三百二十二校の卒業生總數は二〇、二九二で、即ち一校平均六三名  
 強の卒業生を出した勘定であつた。その割から云へば、五年乃至六年後には三三二校  
 からは二〇、九一六名を出す事となる勘定である。之れに前年の落伍者が加はるとなれ



ば、勢ひ競争の激甚なるは止むを得ぬ次第である。帝國大學へ聯絡する實質から云へば、北海道帝大農科及醫科の豫科も、高等學校として數へねばならぬが、之れは専ら同大學のみへ進入する人を容れて居る關係上、省くことを至當とするであらう。八箇の高等學校は若干の擴張を行ふと云へ共、その收容數は知れ切つた事である。大正七年の採用數は八校を通じて二二九四名の豫定である。大正七年三月の中學卒業生からも他の専門學校その他へ入學した者があるが矢張り、前年來累積した受験者を加ふれば殆ど一ヶ年の中學卒業生が全部受験するものに近い數字を見出すであらう。斯くして篩はれる人は氣の毒であるが更に再舉をはかるより他はない。

明治卅五年五月綜合試驗制を實施した文部省は、その後再び各校別の試験制に復し大正六年度に至り、あまりに入學志望者の多くして選擇する場合に希望者多き學校にては相當成績の者も篩ひ落さねばならぬ様な關係であるが爲め、又しても綜合試驗制をどるこゝとなつた。試験の衝に當る者こそ骨の折れる事である。之れが果してよいか否かはこゝでは議論しても詰らぬ。果せる哉、八年度より以前の各校別試験制に復した。

### 餘裕ある學校の擇び方

本當の事を云へば、各學校の入學率を見て志望をきめる様な事ではならない。各學校の入學率の如きは、その年々によつて番狂はせを演ずる素質をもつもので、不安定なものである。もごとく不安定なものではなかつたであらうが、若干安易を狙ふ心地、時勢の影響とが手傳つて左様な結果となるのである。狂ふ數字が悪いのでなくて受験生自身が悪いのだ。然し、年々の受験勉強に虐げられて居る人々にとつては、實に安逸を欲する心丈でなしに、何とか早く落ちつきを求め度い心で焦慮して居るのは同情に値する。



二三年前から、早く自分の子弟を人にしようと思ふので、大學よりも寧ろ専門學校を希望させる人が多くなつて、其の結果が積り積つて大正七年の様な非常な競争時代を出現せしめたが、こゝは一つ考へねばならない。その學ぶ當人の素質と云ふ問題である。經濟と全く反しては困るが、その能力傾向、専門校にとゞまるよりも大學へ進んだ方が適當な人もあれば、大學へ進むべく凡てについて力の不充分なる人もある。それ等の點を深く考へねばならぬのである。兎角一方に偏したがるは邦人の習性で誠に遺憾な事である。然らば、如何にしてその素質を鑑別するかと云ふ疑問も起るのであらう。それは難しい問題であるが、本人及び父兄の自覺と研究によりて解決するものである。先輩に質すのも一法であらうし、其の素質について達眼を有する教師等について指導を乞ふのもよからうし、己れ、工學に志すとせば傳手を求めて工場研究所等の現場を參觀し、具さに腹に入れてかゝるのも一法であらう。もう少し、萬事に餘裕がなくてはならない。

餘裕と云へば、高等學校の受験に就ても、自己の學力を以てしては一高を志すことの不可能を思は、最初から他の高等學校を第一志望として出すの他はない。さうして、略、自分の志す學校を定めて其の土地の風紀衛生物價等を併せて研究したらよいであらう。何も修業であるとは云ふものゝ、北海道の學生がいきなり鹿兒島へやつて来るよりも、仙臺の二高あたりを志して得るに越した事はない。中學世界受験界の記す處によれば、入學について最も苛酷であつたのは一高で、最も安易であつたのは七高とある。(綜合制時代調査)一高は一二三各部各類とも第一志望とした者のみを入學せしめたが、七高では一部甲類にて第五志望まで、同乙類にて第八志望まで同丙類にて第四志望を除き第一より第八志望まで、二部甲類で第五志望まで、同乙類で第三第四第五第八を除き第一志望より全部、同丙類にて第二第五志望を除きて全部三部にて第八志望まで全部入つて居る。此の數字を見た丈では七高の内容の如何にも空疎な事を見せたもので、かゝる事が公刊雜誌の上に發表せられた事は學校當事者



の迷惑となるかに考へられるが、こゝ一二年の後は各高等學校とも、略成績に於て均分したる結果を見られようかと窺かに喜んで居る次第である。

何となれば、米澤高工の如き、地理的缺陷のある學校へ一時に受験者が押し寄せた様に、七高も亦た、その入學希望者に對する博愛主義を豫想して必らず一度や二度は多數受験者の襲撃を見るであらう。それが多數であれば選擇も出來ると云ふものである。來る年の七高の蓋をあげて見れば案外多かつた。今度はこの高校が比較的少ないから其處へ、と云ふ具合に案外受験雜誌の記事が學校の素質改善の氣運をつくるであらうと思はれる。

眞面目なる受験者は、どうしても先に目標を定めて、敵に弱い所を探し出して攻めると云つた様な、奇兵の攻略を用ゐない方がいゝ。何等の知己友人先輩親戚等のない人、土地的好尚のない人なれば格別、敵の急所を衝くよりも、もう少し他に研究を要する所があるであらう。

### 各高等學校の比較研究

大正六年に於ける各高等學校の入學者の總平均點數は一高四九二を第一に、以下三高二高八高四高五高六高七高の順位であつた。之れまでも略入學者の狀況は此の順位であつた。それは多少地理的特徴を示して居る事をも思はねばならぬ。一高は東京の俊才が入學する以外に、地方の出身者にして、一高入學を無上の榮譽として受験する秀才が多い關係である。目下は一高に於ける受験者は東京府所在中學出身者と限られて居るので、わざ／＼地方の秀才が東京の中學上級へ轉學して一高に於ける受験の便宜を得ようとして居る者も少なくない。自治寮の歴史と云ひ、出身者が大學にいつて以後も尊敬される事、四角ばつて云へた話ではないが一高を希望する好餌はあり餘る計りである。三高にした所で、所在地は京都と來て居るし、風光の明媚な關係から京都大學の所在地であるし、四圍に學校も多いし、一高に次ぐ秀才の多いと云ふ事も



人をひきつける材料になるのである。

二高はもとより東北唯一の學府だ。獨逸ならば萊府と云ふところだ。秋田に鑛山専門學校、米澤に高等工業學校があるけれども、仙臺は東北帝國大學が二學部にして總て三學部を併せんとし、私學としては東北學院、空氣の清いなまなか商工業が盛でない丈、勉強するのには持つて來いの土地と來て、かねて便利も悪くないので、希望する人が多いのも無理はない勘定だ。八高は東京に近い名古屋にあつて、同地は東海道線で交通の便宜はいゝし、學校地として幾分面白い周圍でないにせよ、名古屋高工、愛知醫專等があつてまるで關係のない土地でもない。便利な點で一高、三高を除いて東京附近關東の學生は大部分こゝへ密集する様である。更に金澤の四高は裏日本を代表せるものと云ふべく、新潟、石川、富山各地方の學生を集めて居て特に秀で、多くなつたり減つたりする事もない様である。

熊本の五高は九州の中心、財的勢力は福岡にあり、同地には九州帝國大學をはじめ

戸畑に私學の尤、明治専門學校等があるが、先づ、高等學校の生徒を薰育する土地としては格好のものに相違ない。五高の他に熊本高工、私立熊本醫專、同九州藥專の三校があつて、福岡を除いては最も多數の専門學校を擁して居るのである。長崎も醫專高商の二校をもつて居るが、高校設置の理想からは熊本がぐつと立ち勝つて居る。六高は岡山にあつて、山陽山陰又は四國の學生生徒を吸収する。岡山には官立醫專もあり、その狀況、やゝ、名古屋に似てさして悪くはない。七高は鹿兒島、南國の情調を汲まんにはこゝも悪くはあるまい。七高が最下位に置かれたとて劣等生ばかりと思つては困る。入學受験には不得手であつたとして、實力發揮に於て他校出に勝る人も少くない。土地には高等農林學校もあり、氣風も悪くはない。

學校の歴史から論ずれば、一高二高が最も古い。一高は東京英語學校の昔から勘定すると明治八年の設立で大正八年まで四十五年になる。十年大學豫備門となり、十九年第一高等中學校となり、廿八年に今の名に改まつたのだ。三高は明治二年九月大阪



洋學校にはじまり開成所、大學區第一番中學、開明學校、大阪外國語學校、大阪專門學校、大阪中學校、大學分校と二年より十八年に至る間に七度も目まぐるしい計りに組織を變更したり改名したりして京都へ移るのをきつかけに第三高等中學校と改名した。さうして舊高等中學校のまゝ、一時は法學部、醫學部、工學部の三部とし大學に進む豫科を全廢して在學生をも他校へ分配したりしたが、又そろやめて大學丈けに高等中學校となつてしまつた。二高、四高、五高は二十年四月から各高等中學校の名によつて始まり、六高は卅三年四月、八高は四十一年七月開校して最も新しい。七高も十七年縣立中學造士館の昔から數へれば永いが二十年十二月高等中學に改め廿九年廢止、卅四年に改めて設けたので中弛みがして居る。

### 入學者の最も多き府縣

大正六年の各高等中學校二、一七九(石川縣立小松中學校調査に據る、中學世界受験界

に於ては二、一八二となり三名の増加となり居れるも暫く小松中學校案に據る)により、各高等中學校の入學者を檢べて見ると、大體に於ては高等中學校所在府縣の優勢を見出す様である。高等中學校入學者の多い縣は、他の專門中學校への希望者も多く、いづれは男兒産出率の多い丈けでなく知識慾、學問慾の旺盛なるものと見ねばならない。

第一高等中學校三五四名の内、所在地東京は一〇七名であつた。次は兵庫の一五愛知一四、廣島福岡各一二名、附近の縣よりは千葉が一〇、埼玉一二、神奈川一一、群馬六、栃木五、茨城四の勘定であつた。即ち、總數の三割強は東京出身者で占めた勘定だ。

第二高等中學校二六三名の内としては、所在地仙臺は第二位で二七名、東京の二三名が上位であつた。之れに次ぐもの新潟の二二、山形の二七、周圍をさがせば以上の山形一七、福島一四、岩手一三、青森八、秋田一四之等を合計した數は全數の三割五分強である。之れに北海道の九、東京のあぶれ三三を加へれば五割弱約半數を制する事

入學者の最も多き府縣



となるのである。

第三高等學校二七七名、之れは流石に所在地京都の四一名が一等多い。其の周圍から捜せば大阪の二二、兵庫の二一、滋賀の一四、和歌山の六位であらう、計一〇四、總教の四割弱である。こゝでも東京組が三十五名持ち込んで、その他は似たりよつたりだ。

第四高等學校二四三名。こゝは所在地の石川は二一名で、他縣の新潟の方が五名も多い二十六名だ。自縣の二一に富山の一五、福井の一四、鳥取の四は取るにも足らぬが前記新潟の二六、長野の一三を加へると九十三名、三割八分強だ。東京の遠征組二九、京都の一〇、大阪の一三を加へると六割弱となつて來る。

第五高等學校二八九名、所在地熊本は四五名、近接福岡はそれにも増して五六の多數である。福岡は全専門學校を合せて三百二十八名、東京に次ぐ多數の入學者を出すのを以て知られて居るところである。其の他大分一四、佐賀一七、宮崎三、鹿兒島五

流石に殆ど九州で持ち切つて他府縣で稍多いのは山口の一六名だ。上記六縣の總數一四〇、即ち四割八分強を九州組が占めて居るのである。

第六高等學校二六六名、流石に所在地岡山は三六名の多數、近接廣島三四名、以下山口一四、兵庫一五、鳥取一〇、島根五、海を距て、香川一一、愛媛八、高知四、徳島二、此の合計は一三九名とある、つまり全數の五割二分強と云ふ勘定だ。

第七高等學校造十館は二三三名、その内、一番多いのは意外にも東京組の三三で、所在地鹿兒島は二八名に過ぎぬ。以下近接の縣を拾へば福岡九、大分四、佐賀四、宮崎三、熊本よりは皆無で此の數を合するも東京を除けば四八名、僅に二割強を支持するのみ、寧ろ他府縣の集合體である。東京の三三、兵庫の一二等を合すれば九三名、辛じて四割弱となる。如何なる理由よりしてか——余りに邊陲の地に位するの故か、他へ志望する者が多くて知らず／＼跡廻しになる關係もあるのであらう。

第八高等學校、二五四名、こゝでは愛知三二、三重二〇、静岡一四、山梨一〇、長



野一二、奈良七、岐阜一〇の数字で、東京下りが所在地よりも多い四三名を示して居るが、それを除いての数が四割一分強、東京を加へると五割八分強の数字となるのである。

各高等學校へ對しては、いづれの縣よりか最も入學者が多いかを一般的に云へば、東京は三一四名で全數の一割四分四厘強をしめ、以下ずつと段が落ちて京都、福岡、大阪、愛知、廣島、山口、岡山等の順だ。然し之れは絶對のものでもなく、且つ多數を出せる府縣はいづれも學生の數に於て他より多數を示して居るので中學卒業生最近三ヶ年の平均入學者百分比から見れば、もつと違ふことゝなるであらう。高等學校以外、他の専門學校を含める数字によれば中學卒業生數の割合よりしては百分の六四を入れた滋賀縣を第一に置かねばならない。

### 新設高校と数字的研究

文部省は高等學校新設地を決定し八年九月より開校する。

第九高等學校……………新潟縣新潟市

第十高等學校……………長野縣松本市

第十一高等學校……………山口縣山口町

第十二高等學校……………愛媛縣松山市

の四校である。また、開校までには相當の時間を要するが、こゝには、その新設せらるべき土地について述べて見たい。此の土地の選定は、現下の状態としては正鵠を得て居る様である。此の事は單に運動や新設地寄附額の多寡によつて定まつた問題ではなく、いづれは、その土地の地理的關係と、専門學校入學者の數及び中學卒業生の數によりて決定したものと信するのである。

大正六年十月の調査によれば、以上四縣の各學校入學者數は、左の如くであつた。



	新潟縣	長野縣	山口縣	愛媛縣
計三三	七九	七〇	六三	三三
計二三	二三	二七	二九	二四
計二七	四〇	二〇	四〇	一七
計九	六	二八	三	七
計六	六	二	四	五
計五	一五	二〇	一六	二
計四	九	八	一五	九
計三	八	八	一五	六
計二	一五	三	三〇	二
計一	一五	三	三〇	二
總計	三三一	一九一	二三四	二二二
計				七九九

註、高校は高等學校八、高商五、高工九(旅順工科學堂を含む)醫專五、高師二、高農七(兩高農の他農大實科二、高蠶三を含む)陸軍二、海軍四(商船校を含む)其他は水産、外語、美術、皇學館通信官吏練習所等五校を含む、合計四七校。

新潟の領分の内には、縣下のみならず、岩越線の交通によつて福島縣方面から、山形、秋田、富山方面をも吸集するものと見るべく、長野縣は自己圈内以外、山梨、群馬方面から東京の落ち零れを拾ふ事となるであらう。山口縣は自縣以外、廣島方面に手を延ばし六高と生徒の爭奪戦を行ふであらうし、裏の方へ廻つて鳥取、島根方面に

誘ひを見せるであらうし、九州の一部も之れに加はるかもしれない。愛媛縣は香川、高知、徳島を自己圈内に入れて従來、六高乃至三高に入學を希望して居た人々を惹きつける様につとめるであらう。もし、高等學校が現下の状態から移つて、入學生徒の少きに苦しむ時代(そんな事はないか)が來るとしたら、岡山の六高對、山口の第十一高、愛媛の第十二高の蠶食戰侵畧戰は興味あるものでなくてはならない。愛媛縣が四國全體を切り従へるとしたら、大正六年の結果に見るも、縣下の三三、香川の二五、徳島の二八、高知の二九計九十五名、更に四國高等學校の見解から脱して、和歌山を入れて北海道高等學校をつくるとしたら、和歌山の四七を加へて百四十二名の生徒が已に得られて居る譯である。

各高等學校新設地所在の中等學校を調べて見ると、左の如くである。

新潟縣……………十二校(大正五年十月現在)

新潟、卷、三條、長岡、小千谷、高田、糸魚川、柏崎、佐渡、新發田、村松、村上(全部縣立)

新設高校と數字的研究



長野縣……………八校（同前）

松本、大町、長野、飯山、上田、野澤、飯田、諏訪（全部縣立）

山口縣……………九校（同前）

山口、岩國、徳山、萩、豊浦、周陽（以上縣立）鴻城、興風、山口國學院（以上私立）

愛媛縣……………六校（同前）

松山、宇和島、大洲、西條、今治（以上縣立）北條（以上私立）

其の卒業生数は大正五年三月に於て新潟縣は五八一名、長野縣五三八名、山口縣（新設山口國學院中學を除く）四七一名、愛媛縣三七三名であつた。此の内、愛媛縣のみ意味を擴張して四國とすれば、徳島の二四八、香川の三三一、高知の一六七合して千百十九名となる。勿論之れを全部高等學校志望者に繰り込む程亂暴な計算ではない四國の學生と云ふことに興味をもつて纏めて見た様な次第である。

### 豫定地はどんな土地か

予は、大正六年、小閑を利用して仙臺地方から新潟富山金澤地方へ向けて學校見物の旅行を試みた。その節、簡單ながらも、新潟そのもの、面影にも接する事が出来た。その印象はもとより稀薄なるを免れぬが、新潟は嚴格なる意味に於ては學校地として適當ではあるまい。何となれば冬が割合に永く、寒く、日本海に面して居る丈けに天氣の悪い日が甚だ多い。そして風儀も事實餘りよい所ではない様である。娛樂機關と云つた様なところは一二の劇場二三の活動寫眞館がある位だ。こゝには明治四十三年を以て新潟醫學專門學校が設立せられ、一步を先んじた角帽の生徒が町中を押し廻つて居るが、割合に温順しく多くは勉強家で、これあるが爲めに町の風儀が害なはれたりど認むべき點が見當らないのは何よりである。一つは學校が新設で教授が若くして懸命に生徒を教へ込む爲めに、ぬらりくらりと遊んで居られぬと云ふせいもあるであらう。先に掲げたる缺點はあるにせよ、何れの地にも若干の缺點は免れ難いから先づ身體の丈夫な呼吸器病などの憂ひのない學生達はこゝへ志すのも悪くはあるまい。

豫定地はどんな土地か



縣下には長岡、高田等の市があり、見物旅行をしようには割合に興味が多い。佐渡が島根もつい近くに見え、船も毎日往復して居る。佐渡は魚のうまい所で郷土的興味の深い土地と聞いて居る。

第十高等學校は、長野縣と定まつてから長野と松本と兩市の間に競争が行はれた。赤星知事などは兩市の間に挟まつて、大分ギユウ／＼と云ふ目に合はされたるやに聞き及んで居る。同縣下には上田町に上田蠶糸専門學校があり、専門學校としてははじめてははない、然し自縣に高等學校がないばかりに、二高へ行き(十五名)四高へ行き(十三名)八高へ行つた(十二名)今度それを統一する事が出来るのである。長野縣人は、由來霸氣に富み又た好學の士が少くない。澤柳政太郎博士の如き長野縣人の先輩であり相當に人材が輩出して居る。殊に教育社會に出て居る人が多いのも面白い。山の中で、全くごちらを向いても海に接して居ない。然し、學生の修養には持つて來いであらう。近く高嶽登え、日本アルプスの如きは目睫の間にある。第十高等學校に遊

ぶ者は、勢ひ、山を愛し旅行を愛せざるを得ない。縣下隨所に温泉の湧き出づるも甚だ樂しみな事である。

汽車にしては、四校の内一番近い。東京まで數時間にして達し得る。恐らく新設の曉には、長野縣を除いては、遊び好きの東京人が多く入學する様な結果となるであらう。

第十一高等學校の山口町は今度はじめて出来るのではなくて、實は二度目である。明治二十年以降三十七年に至る山口高等中學校乃至山口高等學校として存在したことは、世人の多くが知悉せる通りである。第一期の山口高等學校は時勢に伴ふどの名目の下に、三十七年以降大學豫科の生徒を募集せざる事とし、三十八年を以て山口高等商業學校と改稱して、現存せる山口高商がそれである。此の、高等學校を高商に引き直す場合、可なり反對もあつたが、井上侯等のお聲が、りで高等學校はそんなに澤山要らないと云ふ名目の下に高商にしてしまつた。それを又た設けると云ふのであるか

豫定地はごんな土地か



ら随分勝手な話とも聞え、妙な感じもするのである。然し必要とあれば、歴史にこだはる事も要るまい。兎も角、二つの學校は山口縣下の人材養成について、可なりの働きをなす事であらう。

舊山口高等學校は、文化年中萩藩士上田鳳陽が家塾に始まり後鴻城明倫館と改め明治四年中學校とした。その後二三變化して十一年五月山口中學校となり防長教育會の管下に置いた。十九年十一月山口高等中學校と改め、廿七年山口高等學校に改めた。高等中學校初期の校長は河内信朝氏、二代目岡田良平氏、三代北條時敬氏、次に土井助三郎氏の校長心得を挾んで四代は再び河内信朝氏、五代松本源太郎氏を以て歴史は高商へ移つた。二十四年以降三十九年まで十六年、卒業生八百七十三名、内法學博士二醫學博士一五、工學博士六、文學博士一、理學博士二、農學博士一、計廿七名を出して居る。(大正七年調査)

新高等學校は、全く新らしき精神の下に生れたるものでなくてはならぬ。山口は學

校地としては頗る格好の土地だ。氣候も暖かく、人氣もさまで悪からず、同じ縣下としても下の關あたりとは格段の差である。然し、設けられて見れば分らぬが、従來同縣のやり口によるも入學者の大部分は同縣人より得ると云ふ方針を以て進むであらう。それもよからう。

愛媛縣にいたりては全くの新顔だ。そして四國に於ては最初に生るべき高級學校の一つだ。愛媛香川の間に多少競争を見られた様であるが結局愛媛の物となつた。今までは、好學の學生達は、海を渡つて東京乃至大阪京都に遊び、左もなくば對岸の岡山又は廣島に遊んで居た。岡山には六高がある醫專がある。廣島には高師に加へて近く高工が設けらるゝ筈だ——久しく希望して居たものはこゝに事實となつたのだ。松山市及びその界限からは學者文士軍人等知名の士が多く出て居る。四國の内でも文化史的に有名な土地である。人情風俗もさまで悪しからず、今後如何の面目を以て學校市を形成するか。靜かに眺めて居たい。

豫定地はどんな土地か



### 學制改革案と高等學校

之れまで記し來つた事は、大正七年までの高等學校に就ての記事である。高校が中學校と帝國大學各分科と繋ぐ中繼機關たる實際に見ての話である。此の高等學校三年の制度は實は可なり厄介がられて取り扱はれて來た。いつも教育會議で問題になるは、此の案である。筆者は、高等學校問題の大體をも記して人々の一般知識に供へ度い。學制問題は正に二十年來の宿題で、大正七年下半年に至り漸く解決した。

そも學制問題の端を發したるものは、等しく學校の聯絡問題からであつた。元來我國の學制は範を歐米に採り本位を大學に置いた。即ち卒業生を歐米一流の大學卒業生に比し遜色なからしめんとしたものである。と共に一方兒童の學齡を定め小學校を設け初級より漸次兒童心身發達の序を追うて向上育成の計畫に出でたのである。それで大學より豫科を下し小學校より中學校を上し上下兩端より發達して二者の繼合を策す

るのであつたが、その繼合がうまく行かぬので問題になつて居たのである。明治廿九年から三四年間最も論議されたのは此の問題であつた。廿九年十二月に初めて設けられた高等教育會議の議題が之れであつた。學校の聯絡不充分なるは教育の施設内容が一般に不完全なのと中等教育及高等教育を通じて學校が不足なのに原因するとの案を得た。そして日清戰役の結果として國力の増進の結果に伴つてその擴張整備の度は昔日の比でなくなつた。生徒の數が殖えた事は非常なもので、中學校の増加率に見ても廿九年には一二一校が卅五年に二五八となつた。中學入學希望者の數も夥しく増加した。

學制の理想的運用は、幾度か立案された。修業年限短縮が輿論となつたのは卅五年一月『政府は大中學の直接連絡を有するの例となし學生修業の年限を適當に短縮し高等教育の設備を擴張されん事を望む』と云ふ建議案が議會に久保田男等の手で提出されてからの様に思ふ。大學の年限短縮案が輿論となる背景には私立大學が猛然たる



勢ひで發達して來た事のある事を一寸記して置く必要がある。

卅六年、兒玉伯に代つて文相となつた久保田男が新任早々提出した學制案の内容は

- 一、高等學校は一半を帝國大學に專屬せしめ他の一半を實業專門學校に改造す
- 二、大學制度を改革し帝國大學以外大學校を設け前者は主として學術の蘊奥を攻究するを目的とし後者は専ら實用的人物を養成すること
- 三、帝國大學の講座は自由聽講とする事

主義はもとより異存がなかつたが、條理三分感情七分の世間が反對をした。然し、後年の學制改革案は此の久保田案に胚胎した所が多いのである。

その後にも記すべき事が多いが、明治四十年の中學校長會議に於て現在の中學校に二ケ年の高等科を附設するの必要ありと認むと議決した事は、注意すべき事であつた四十三年の議會に今度は松田正久他數氏より學年短縮に關する建議案が出た。時の文相小松原氏は此の建議を機會として高等教育會議にかけて改革案を作りに係つた。

- 一、高等普通教育を中學校及高等中學校の二とし中學は年限を五年とするも第四年迄を普通教育五年を實科中學と爲すこと
- 二、高等中學は年限を三年とし中學四年に接続せしめ文科理科に分つこと
- 三、高等中學に四年の中學を併置するを得せしめ現在の高等學校大學課程を高等中學校とし指定の府縣にも設けしむること
- 四、第二外國語を隨意科とす

此の案は樞密院まで行つて手を入れられ、數を限定されたりなごして一度は勅令で出たが文相の更迭と共に流れとなつた、然し消滅ではない。その後米國ハーヴァード大學前總長エリオット博士の來朝談によりて新らしく劃一打破の新旗幟が擧げられた。その後教育調査會に一木案、菊地案等が出た。いづれも高等學校より大學の處分案であつた。菊地案は高等學校を廢止し修業四年の學藝大學とし中學より進入の學校にて年限四年以上のものは凡て大學校とし、公立私立を認め卒業生に學士號を認め帝國大學は學藝大學三年修了者の進入を許すと云ふのが根本であり、之れは帝國大學系より低級大學案として反對せられた。辻案も江木案もあつたが共に輿論には成り得な



かつた。

教育調査會委員會に於る案も、小松原案を標準とし、その間に大した案も見出せなかつた。之れは中學を四年とし高等學校とも七ケ年を通じて一貫の教育を授け卒業者は官公私の大學に入るを得しめ設立の場合は官公私立を許可すること等が重要な點であつた。大正四年九月高田文相によりて文部省の新大學令が發表され年限短縮と劃一打破を眞つ向に振りかざして居た。その案の次第は世人の記憶に新しい事であるから敢て記すまい。相當實行價值もあると信じられて居たに拘らず特別委員會の修正となり遂に解決を見ずして内閣の更迭を見た。一は高田博士が稻門出慮に際し餞せられたる言葉が他から聞いてあまりに冗辯であつた點も影響せるやに聞き及んで居る。高田案は一言にして云はゞ私立大學の向上案と云つてもよかつた。

大正六年十二月、臨時教育會議主査委員會は、答申案として左の條々を提出した。(其の精神は其儘大正七年秋、新大學令並に高等學校令として發布せられた。)

- 一、高等學校は高等普通教育を授くる所とする事
  - 二、高等學校修學年限を三年とし其第一學年には中學第四學年修了者を入學せしむること
  - 三、同第二外國語を隨意科目とする事
  - 四、高等學校及七年制の高等學校は其第三學年の上に更に一年の課程を設くるを得しめ、之を卒りたる者には相當稱號を附與す
  - 五、高等學校は官公立又は私立(財團法人)とする事
  - 六、高等學校は單獨に設置し又尋常科(中學)四年高等科三年合計七ケ年の高等學校を設置するを得ること
  - 七、高等學校及七年制の高等學校を文科理科に分つこと
  - 八、中學校の修業年限を現制(五年)の儘とする事
  - 九、七年級の高等學校及中學校又は豫科を設置するを得しむること
  - 十、高等學校令及高等中學校令は之を廢止すること
- 數字の改革案は一年の短縮を判然と認め、高等學校を現制の三部制より二部制に改め醫科を理科に合併し、中學校より高等學校への間に一年を減することは輿論であ



る。然し現在の如く多数入學志望者を擁して居ては、中學四年より高等學校一年に進まじむる如き出來ない相談であらう。中學五年を卒業して受験専門に高等豫備校で修業してすら落伍する者が多いのであるから、此の高等學校案が現在官立の高等學校丈の標準なれば、所詮實行價値の乏しい案である。或る、東京に於ける早稲田慶應の如き豫科を二年に延長して居る學校は中學五年と併する時は七年制の高等學校と同一の意味に於て、官公私立、自由に生徒の入學を許すか——兎も角、暫らく注意して見る必要がある様である。

### 各高等學校の學費一覽

本表は各高等學校に於て調査したものに據つたものである。表中空欄のあるのは學校によりては不要のものもあらうし、或は不用でなくて擧げてないものもあらう。故に一概に見ることは出來ぬ。従つて總て總計の數字は殊更に示さぬことにした。

新入學當時		冬服	夏服	冬帽	夏帽	靴套	外脚	脚機	器機	備考
一	高	三、〇〇	一五、〇〇	二、〇〇	五、〇〇	五、〇〇				外套は新調せざるからず
二	高	三、〇〇	一五、〇〇	一、五〇	四、〇〇	五、〇〇	一五、〇〇	二部 一〇、〇〇 三部 二、〇〇	柔道 擊劍 約新試費 四、五〇 机本箱 三、〇〇	
三	高	三、〇〇	一九、〇〇	二、八〇	四、五〇	六、〇〇	三、〇〇			二部生に器製圖
四	高	三、〇〇	一六、〇〇	二、三〇	四、五〇	六、五〇	一七、五〇			右の外教科書を要す
五	高	三、〇〇	一五、〇〇	二、〇〇	四、五〇	五、〇〇	一、〇〇	二部 一、〇〇		擊劍具 三、九五 柔道具 二、八五 俱樂部入會費 二、五〇
六	高	三、〇〇	一五、〇〇	二、〇〇	四、八〇	六、〇〇		二部 六、〇〇 六、〇〇		端艇準備 金一、〇〇 雨具 五、〇〇 椅子 八、〇〇
七	高	三、〇〇	一五、〇〇	二、〇〇	四、五〇	五、〇〇	一、〇〇	二部 一、〇〇 一、〇〇		竹刀代 七、六〇 柔道衣 三、六〇 端艇建造 五、〇〇 基金 五、〇〇 冬服は小倉なら 七、〇〇
八	高	三、〇〇	一九、二〇	二、〇〇	四、五〇	五、〇〇		二部 三、〇〇		







年 學 三 第		授業料	宿舍費	食費	校友會費	行軍費	教科書	參考書	下宿料	備考
一	高	三、五〇〇	九、五〇〇	九、〇〇〇	三、〇〇〇	二、〇〇〇		二、五〇〇		
二	〇	三、五〇〇	九、〇〇〇	二、五〇〇	三、〇〇〇			二、〇〇〇	一、一〇〇	
三	〇	三、五〇〇	九、〇〇〇	三、五〇〇	一、五〇〇	一、七〇〇	三、二〇〇	一、五〇〇	一、六、五〇〇	
四	〇	三、五〇〇	九、〇〇〇	二、五〇〇	一、〇〇〇					
五	〇	三、五〇〇	九、〇〇〇	二、五〇〇	二、五〇〇	一、五〇〇	一、八〇〇	二、五〇〇	三、二〇〇	二部乙丙 器具五、六 部五、三 實部二、三 三〇〇
六	〇	三、五〇〇	九、〇〇〇	二、五〇〇	二、五〇〇	一、五〇〇	一、八〇〇	二、五〇〇	三、二〇〇	二部三部 費に實 乃至六〇 三〇〇
七	〇	三、五〇〇	九、〇〇〇	二、五〇〇	二、五〇〇	一、五〇〇	一、八〇〇	二、五〇〇	三、二〇〇	二部乙丙 械凡そ 三〇〇
八	〇	三、五〇〇	九、〇〇〇	二、五〇〇	二、五〇〇	一、五〇〇	一、八〇〇	二、五〇〇	三、二〇〇	

(中學世界編輯部調查)

學校	第一志望	第二志望	第三志望	第四志望	第五志望	第六志望	第七志望	第八志望	合計
五高	七四八五三八八四二四	七四二九三七〇三九一	一四九〇三四三九九	一四四三三六九四〇〇	三三九四三六三三八	一四四四九三六五三九四	一七四三八三六三三三	一四三八四三三三三	三、七、四、八、五、三、六、四、二、四、〇
六高	三四五六三六八四〇〇	五四〇一三六四三七六	二四四四七三六八四〇〇	一三七八三七八三七八	三三九四三六三三八	一四四四九三六五三九四	一七四三八三六三三三	一四三八四三三三三	三、六、四、五、六、三、六、三、九、六
七高	二四三八四一六四一七	二四三七四〇四四二	一四二六四六四二六	一三六四三六四三六四	一三六四三六四三六四	一四四四九三六五三九四	一七四三八三六三三三	一四三八四三三三三	三、八、四、四、九、三、六、三、九、四
八高	五四〇九三七一三八八	一五四二二三六三三九	一七四四九三七〇四〇八		一三六四三六四三六四	一四四四九三六五三九四	一七四三八三六三三三	一四三八四三三三三	三、七、四、四、九、三、六、三、九、三

第一部 丁類

學校	第一志望	第二志望	第三志望	第四志望	第五志望	第六志望	第七志望	第八志望	合計
一高	三九五〇五〇四〇四三四								三九五〇五〇四〇四三四
二高	七四〇三三六五三八三	二三三九八三三三三七七							三、三、九、〇、三、三、六、五、三、八、三
三高									
四高									
五高									
六高									
七高									
八高									
合計									三、三、九、〇、三、三、六、五、三、八、三



# 各高等入學得點表

大正六年七月舉行

## 第一部 甲類

學校	第一志望			第二志望			第三志望			第四志望			第五志望			第六志望			第七志望			第八志望			合計		
	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低
一高	75	84	85	15	15	15																					
二高	14	14	14	14	14	14																					
三高	38	38	38	38	38	38																					
四高	18	18	18	18	18	18																					
五高	23	23	23	23	23	23																					
六高	18	18	18	18	18	18																					
七高	6	6	6	6	6	6																					
八高	1	1	1	1	1	1																					
合計	395	400	404	333	338	343	239	244	249	184	189	194	129	134	139	94	99	104	69	74	79	49	54	59	39	44	49

## 第一部 乙類

學校	第一志望			第二志望			第三志望			第四志望			第五志望			第六志望			第七志望			第八志望			合計		
	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低
一高	36	46	47	7	7	7																					
二高	15	15	15	15	15	15																					
三高	15	15	15	15	15	15																					
四高	5	5	5	5	5	5																					
五高	5	5	5	5	5	5																					
六高	6	6	6	6	6	6																					
七高	3	3	3	3	3	3																					
八高	1	1	1	1	1	1																					
合計	366	466	471	333	338	343	239	244	249	184	189	194	129	134	139	94	99	104	69	74	79	49	54	59	39	44	49

## 第一部 丙類

學校	第一志望			第二志望			第三志望			第四志望			第五志望			第六志望			第七志望			第八志望			合計		
	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低
一高	38	41	44	1	1	1																					
二高	16	16	16	16	16	16																					
三高	36	36	36	36	36	36																					
四高	6	6	6	6	6	6																					
五高	7	7	7	7	7	7																					
六高	3	3	3	3	3	3																					
七高	2	2	2	2	2	2																					
八高	5	5	5	5	5	5																					
合計	386	416	441	333	338	343	239	244	249	184	189	194	129	134	139	94	99	104	69	74	79	49	54	59	39	44	49

## 第一部 丁類

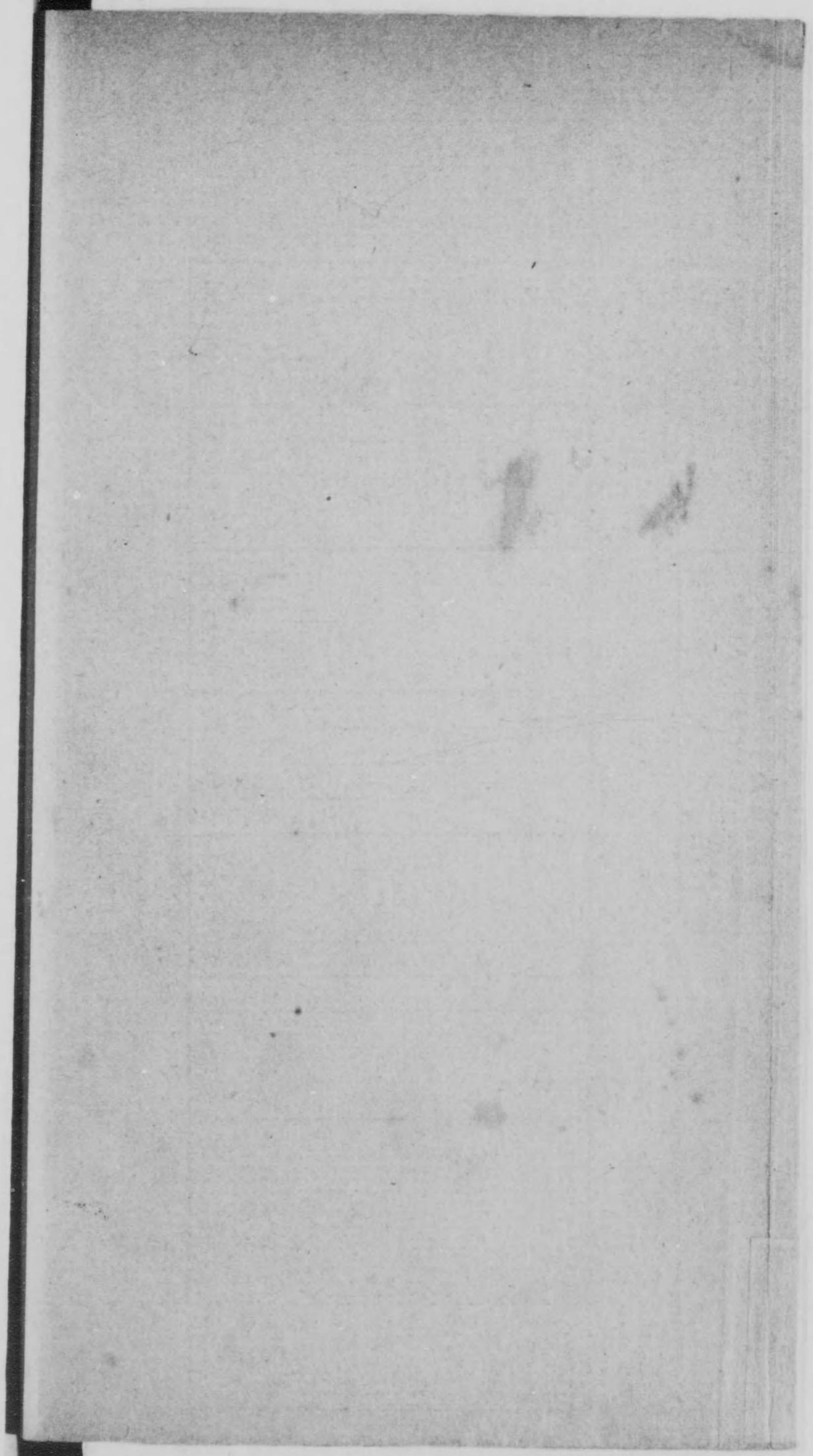
學校	第一志望			第二志望			第三志望			第四志望			第五志望			第六志望			第七志望			第八志望			合計		
	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低	人	最高	最低
一高	39	40	44																								
二高	7	7	7																								
三高	74	74	74																								
四高	3	3	3																								
五高	3	3	3																								
六高	3	3	3																								
七高	3	3	3																								
八高	3	3	3																								
合計	395	400	404	333	338	343	239	244	249	184	189	194	129	134	139	94	99	104	69	74	79	49	54	59	39	44	49







欠





# 欠

## 四、書 取

下ノ文章中右側ニ傍線ヲ施シタル語ニ漢文ヲ宛テ又文法上誤アラバ之ヲ正セ

ゲン | コン | セ | カ | イ | ノ | ジ | ヤ | ウ | ハ | ヒ | ヲ | フ | テ | ワ | ガ | コ | ク | ミ | ノ | セ | キ | ニ | ヲ | オ | モ | カ | ラ | シ | ム | イ |  
 ヤ | シ | ク | モ | セ | イ | ネ | ガ | ク | セ | イ | タ | ル | モ | ノ | ハ | コ | ゴ | イ | チ | ダ | シ | ノ | セ | イ | レ | イ | ヲ | ク | ハ | キ | イ | チ | イ | ガ |  
 ク | ゲ | フ | ノ | ケ | ン | ヲ | シ | ニ | ツ | ト | ム | ト | モ | ニ | セ | シ | シ | ト | ク | セ | イ | ノ | シ | ウ | ヤ | ウ | ニ | シ | タ | ガ | ヲ | タ | ジ | ツ |  
 ゲ | フ | ヲ | ハ | リ | テ | シ | ヤ | ク | ワ | イ | ニ | イ | ツ | レ | バ | ヲ | ク | ハ | ウ | カ | ス | エ | ウ | ノ | キ | ザ | イ | ト | シ | テ | コ | ク | ウ | ノ |  
 ハ | ツ | テ | ニ | キ | ヲ | シ | モ | ヲ | テ | セ | イ | ダ | イ | ノ | ケ | イ | タ | ク | ニ | ム | ク | ル | ト | コ | ロ | ナ | カ | ル | ベ | カ | ラ | ズ |

## 英 語

### 一、解 釋

1. New-year birthday resolutions are good enough as such ; but unless they are got into heart and life, as well as down in neat lines on paper, they will amount

大正六年度全國高等學校入學試驗問題



Washington

- to little.
2. It has been said, and truly, that it is the defeat that tries the general more than the victory. Washington lost more battles than he gained; but he succeeded in the end.
  3. The most reckless sinner against his conscience has always in the background the consolation that he will go on this course only this time, or only so long, but that at such a time he will amend.
  4. After the introduction into Europe of cotton and linen rags as materials for paper-making, the use of other vegetable fibers was for many centuries, entirely or almost entirely, given up; not so much, however, on account of their unfitness, as because rags, besides being admirably adapted for the purpose, were cheaper than any other material.

二、英(獨、佛)譯

(注意) 答案ハ問題ノ下ニ横書スベシ

- 1 山登りは愉快で心身の爲によいが海の旅にも之に劣らぬ趣味と實益がある
- 2 歐洲戦争が始まった頃にそれに関する電報や通信が餘程吾々の興味を惹いたが戦争が長く続いた今日では左程でもなくなつた様だ

三、英語書取

When Nelson spoke to the sailors of the English fleet just before a great battle, the words he used were: "England expects every man to do his duty." The words are just as true for the ordinary world, and for the common everyday battle of life in which we all have to fight.

五、獨語解釋

1. Stähle den Körper, mache und erhalte ihn gelenkig! Alle Übungen, die darauf hinzelen, sollen bei der militärischen Jugenderziehung an erste Stelle treten.
2. Viele sind irriger Ansicht über, das was zum Gelingen unsrer Bestrebungen und Unternehmungen nötig sei. Die einen glauben, Dass alles ankomme auf sorgfältiges



- Überlegen, richtiges Angreifen, tatkräftiges Vollführee; andere erwarten das meiste vom Glück.
3. Der Mensch wird durch starke Bande an den Boden der Heimat gefesselt. Gleichwohl gibt es mancherlei Veranlassungen für ihn, sei es vorübergehend, sei es für immer, die Heimat zu verlassen und in die Ferne zu eilen.
4. Allgemein anerkannt ist, dass wir der Kolonien bedürfen und der Freiheit der Meere. Dass jene nur zu behaupten sind, diese nur zu erringen ist durch Seeherrschaft, hätte niemals auch nur einen Augenblick in Zweifel gezogen werden sollen.

六、獨語書取

Erziehung und Unterricht haben den Zweck, den Menschen zu belehren und zu veredeln. Wer die höchsten Ziele der Bildung errichten will, muss aus den Quellen der Wissenschaft, der Religion und des Lebens schöpfen. Aber auch die Natur kann uns in dem Streben nach Bildung förderlich sein; auch sie führt uns zum Wahren, Schönen und Guten.

七、佛語解釋

1. Ce prince, qui ne fit usage que de ses seules forces, détermina sa clante en formant des desseins qui ne pouvaient être exécutés que par une longue guerre: ce que son royaume ne pouvait soutenir.
2. La France, dont le réseau ferré est à peu près achevé, possède des lignes qui desservent toutes les parties de son territoire et se prêtent au transit international.
3. Les agriculteurs se plaignent de ne pouvoir vendre leurs produits, les commerçants et les industriels voient leurs magasins encombrés et ne peuvent se débarrasser, même souvent à perte, de leurs marchandises.
4. L'impatience qui porte à contredire les autres avec chaleur ne vient que de ce que nous ne souffrons qu'avec peine qu'ils aient des sentiments des nôtres. C'est parce que ces sentiments sont contraires à notre sens qu'ils nous blessent, et non pas parce qu'ils sont contraires à la vérité.

八、佛語書取

Il est impossible de nier l'influence qu'ont exercée les conquérants sur la civilisation des peuples. C'est à tort qu'on nous les a tous montrés comme des ambitieux, des



tyrans qui ont désolé la terre, et qui n'ont laissé après eux que misères, ruines et calamités publiques.

算 術 (一 冊)

一、二、三

1. 次ノ式ヲ簡單ニセヨ

$$\left[ 16 + \left\{ \frac{x^{\frac{1}{2}} + a^{\frac{1}{2}}}{x^{\frac{1}{2}} - a^{\frac{1}{2}}} + \frac{a^{\frac{1}{2}} - a^{\frac{1}{2}}}{x^{\frac{1}{2}} + a^{\frac{1}{2}}} - 2 \frac{x - a}{x + a} \right\}^2 \right]^{\frac{1}{2}}$$

- 2. ニツノ有理數ノ和ハ其ノ二數ノ中絶對値ノ大ナルモノト同符號ヲ有スルコトヲ説明シ依リテ方程式  $ax^2 - x + b = 0$  ノ二根ガ有理數ナルトキ其ノ二根ノ中絶對値ノ大ナルモノハ  $a$  ト同符號ニシテ絶對値ノ小ナルモノハ  $b$  ト同符號ナルコトヲ證セヨ
- 3. 次ノ聯立方程式ヲ解ケ

$$x + y = 5 \quad (x^2 + y^2)(x^3 + y^3) = 455$$

- 4. 凸多角形アリ其ノ内角ハ等差級數ヲナシ最小角ハ  $120^\circ$  ニシテ公差ハ  $5^\circ$  ナリトイフ其ノ邊數ヲ問フ



一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

Q1. 四邊形 ABCD = 於テ邊 AB ト邊 CD トノ和ガ邊 BC ト邊 DA ノ和ニ等シキト

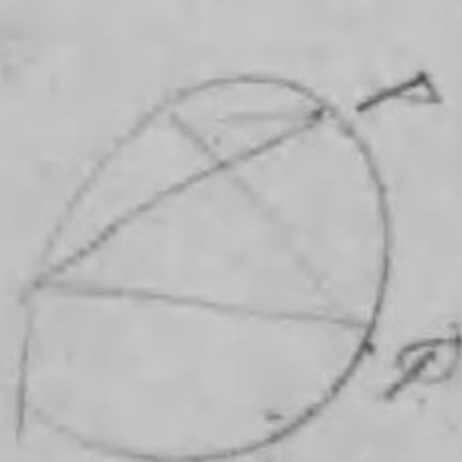
キハ此ノ四邊形ニ内接スル圓ヲ畫キ得ルコトヲ證セヨ

- 2. 與ヘラレタル圓周上ノ與ヘラレタル二點 P, Q ヨリ此ノ圓周上ノ一點ニ至ル二直線上ノ正方形ノ和ガ最大トナル點ヲ求メヨ



算 術 (第二部及第三部)

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百



- 1.  $a^2 - 3b^2 - 3c^2 + 10bc - 2ca - 2ab$  ヲ  $a$  ヲ含ムル式ノ平方ト  $a$  ヲ含マザル式ノ平方トノ差ニ變形シテ之ヲ因數ニ分解セヨ

大正六年度全國高等學校入學受驗問題



2.  $a, b, c$  が實數ナルトキ  $(x+a)(x+b) + (x+c)(x+a) + (x+b)(x+c)$  が  $x =$  於ケル完全平方ナル爲ニハ  $a, b, c$  ハ互ニ相等シキコトヲ證セヨ

3. 次ノ聯立方程式ヲ解ケ

$$x+y+\sqrt{x+y}=12 \quad x^3+y^3=189$$

4.  $x^3+ax^2+bx+c$  及  $x^3+bx+c$  が公約數  $x-k$  有スルトキハ  $(a-1)^2-b(a-1)+c=0$  ナルコトヲ證セヨ但シ  $a \neq 1$  ニ等シカラズ又  $c$  ハ零ニ等シカラザルモノトス

5.  $(1.08)^x$  ノ整數部分ガ四桁ノ數ナル爲ニハ  $x$  ノ最大値及最小値ハ如何ナル數ナルカ但シ  $x$  ハ整數ナリトス

$$\log 2 = 0.30103$$

$$\log 3 = 0.47712$$

二、内接圓

1. 圓ニ内接セル四邊形 ABCD ノ對角線ガ互ニ直角ニ交ルトキ其ノ交點 O ヲリ各邊 AB, BC, CD, DA へ下セル垂線ノ足ヲ夫々 E, F, G, H トスレバ此ノ四點ハ同一圓周

上ニ在ルコトヲ證セヨ

2. 圓ノ二ツノ弦 AB, AC ノ夾ム角 BAC ガ  $60^\circ$  ナルトキ弧 AB ノ中點 M ト弧 AC ノ中點 N トヲ結付クル直線ガ AB, AC ト交ル點ヲ夫々 P, Q トセハ PQ 上ノ正方形ハ P M ト Q N トノ包ム矩形ニ等シキコトヲ證セヨ

三、三角法

1.  $2 \sin A = \sqrt{3} \tan A$  ニ適スル角 A ノ中ニテ  $-360^\circ$  ト  $360^\circ$  トノ間ニ在ルモノヲ悉ク求メヨ

2.  $\cos 180^\circ \cos 132^\circ + \cos 132^\circ + \cos 12^\circ + \cos 12^\circ \cos 108^\circ$  ノ値ヲ求メヨ

歴史 (第一部)

一、明治二十七八年戰役後ニ於ケル我が帝國ノ新領土、租借地及ビ現時ニ於ケル占領地ノ位置ヲ略圖ニテ示シ併セテソノ由來ヲ簡單ニ記セ



- 二、支那宋代ノ文學儒教ヲ就キテ記セ
- 三、獨・埃・伊三國同盟ノ由來ヲ記セ
- 四、左ノ三項ニ就キテ記セ
  - (イ) 間宮林藏(倫宗)
  - (ロ) 房玄齡
  - (ハ) イグナチウス、ロヨラ (Ignatius Loyola)
- 五、左ノ三項ニ就キテ記セ
  - (イ) 正倉院
  - (ロ) バグダード (Bagdad)
  - (ハ) アウステルリツ (Austerlitz)

物理 (第二部及第三部)

1. C. G. S. 單位ノ便利ナル點ヲ説明シ且體積各2米立方ノ空氣、水及鐵ノ質量ヲ求メヨ 但シ空氣ノ比重ヲ 0.00129 トシ鐵ノ比重ヲ 7.8 トス
2. 太陽ニヨリテ地面ノ一部分ガ熱セララルトキハ之ニ接スル空氣ハ (a) 上方ニ向ツテ昇騰シ、シカモ (b) 上層ニ至ルニ從ヒテ冷却シ、 終ニ (c) 雲ヲ生ズルニ至ルトイフ (a)(b)(c) ノ三段ニツキテ其ノ理ヲ説明セヨ
3. 音ノ振動數ヲ測定スル方法ヲ問フ
4. 焦點距離 1 米ノ凸「レンズ」ノ後方 0.5 米ノ處ニ「レンズ」ノ軸ニ直角ニ平面鏡ヲ置クトキ「レンズ」ノ前方 2 米ノ處ニ在ル光點ノ像ハ何處ニ生ズルカ
5. 感應電流トハ如何ナルモノナルカ之ヲ應用セル器械三種ヲ舉ゲヨ  
(次項参照、大正七年度の問題も判明し居れども、中には略けり)





### 選抜試験調査委員報告

|| 本篇は、各委員より文部省に對して報告せるものを頗る有益に感じ、國語體に改め抄出したもので、文部省當局並に委員諸氏に謝する。もとより責任は筆者にある ||

### 國語漢文特に作文に就いて

#### A 試験委員談

大正六年の課題愛國心は普通教育を受けた者には平素習熟の觀念で文材を得るに苦まず先づ適應の問題であつた事を信ずる。  
然し適應の題なりしに比しては應試の文は上出来といはれない、文字の訛謬は例年の如く雜出し、造句の不整は近年殊に其量を増した、二三優秀の作を除く外、多數は皆觀るに堪へぬ陋態である。

抑、作文課の教育上訓練に價値あるは、記憶把持を資し且つ精神發作の明敏を期するにある。用字造句の如きは其の記憶力に訴ふれば足ること、作文能力の全部でない。作文に於て最も力を致すべきは精神活動の上にある、而して此の目的を達せんには造句より文の組織に涉りて工夫が無ければならぬのに、感想を叙するに順序なく、間架布置に用意を欠き、提筆もなく住筆もなく聲響もなく步趨もなく首もなく尾もなく、何うして之が文といはれるか、其弊根は思ふに目下の作文教授の不備から来る結果を生じて來るのではないか、さりとて學界の爲遺憾とする次第である。

今、繁冗を避け其の二三の要例を摘出して附記すると、用字の訛謬、  
仰(抑)も戰亂たるもの

數百年に逆つて(溯つて)

世界萬國をして皆是に順せしむ(准)

の類枚舉に違あらず、中には一天萬乘を一天万上と書きたるものも屢目に觸れた

國語漢文特に作文に就いて



万乗の文字が意義を失つた今日には醬油樽の徽號めきたるものと誤れるも餘儀なしといはれようが、世界未曾有を世界味噌有と誤つて居る滑稽も亦見受けられた。  
造句の不正は、

如何で愛國心と謂はんか。

豈稱揚するに足らず。

生れし國を愛すは人の至情なり

我が帝國の其の顧みるに祐々たる二千五百年

吾國民は全て國の爲には身を粉砕にして盡くす之を愛國心の有する所以なり。  
の類である。此等は平生文法を重んぜず、若くは正しく教へざる結果といはれても仕方があるまい。

組織の不備、

亂麻の如き戰國時代を見よ信長は愛國心の充滿せし勇將ならずや秀吉は愛國心燃

ゆるが如く盛なりしなり、彼等は愛國心盛なる爲めに矛を交へしなり野蕃民族にせよ文明國人にせよ各相異なる愛國心を有す或者は身の安全を計る爲或者は財の爲、或者は無意識に自らが天性に従つて或は熱烈なるものあり、或は然らざるものあり

の類は、並立の句法を失せるもので、

明治十年前後より盛に西洋文明侵入し以來五十年吾國上下を歐化せんとしつゝあり衣食住は勿論今や正に神髓にまで達せんとす此の時に於て盛に國粹保存を説き或は國史により舊習によりて歐風を駆逐せんとすされど彼等は我大和魂即愛國心を信すること少し見よ數回の大戦に於て益々其の發達見れ海外殖民の其衰へたる發見し得ず吾が愛國心は絶對の價値を有するものにして少しの容喙の席なし。  
の如きは、辭を遣るに順序の無いものである。

社會に出てゝは己が職務を勵み又國家の義務たるべき徵集合に基きては國の爲に



盡し戦争にありては君に命を捧げ榮えある戦死否な戦死に非ざるも愛國心なり。の如うなのは起筆住筆の不明なるもの、従つて文に統一がない、此はその短小なる實例の一つ、此の種の文は今時最も多い、讀者をして困惑せしむるも當然である、其の響の面白くないものには、

我國の彼の如何なる大國に對しても少しのおそるゝに足らざるは何ぞや皆これ愛國心の致す處にして他なし之を以て彼の少兵を以て日清、日露の如き大戰に於ても勝を得たる也。

愛國心盛なれば國盛に愛國心衰ふれば國衰ふ故に見よ我國は國小なりと雖彼の大國を以て聞えたる清強兵を以て世界の耳目を轟かしたる露を破りしにあらずや然れども近來に於ては果して愛國心を以て世界に誇り得るか試に一瞥せよ各人身を捨て家を去り親と離れ妻子と別れ鮮血を滴して戰場に戦ふにあらずや實に其の愛國心や驚くべきなり然るに我國人は平然として國家の利を圖らんとはせずして徒

に私利を貪らんとす豈彼等に對して耻ぢざるを得んや。

と云つた様なのがある、實にお話にならぬ、文には一起一落自然の節奏のあることを知らず、矢鱈に頓呼法反踵句法咏歎自問自答を用ひて文氣を張らんと企てたものと見るの他はない。

### 英語について

#### B 試験委員

▲第一部 英譯(第一問) 山登リヲ譯スルニ Mountaineering ト云フ六ヶ敷イ文字ヲ使用シタモノノ至ツテ多カッタノニハ意外ニ感ジタ、斯ノ如キ六ヶ敷キ文字ヲ知リ居リナガラ、譯文ハ全ク物ニ成ラズ、唯此ノ語ヲ知ツタガ爲ニ幾分ノ點ヲ得タ様ナモノ、随分多カッタコトモ意外ニ感ジタ、是ハ賞節登山流行ノ爲登山ナド云フコトガ屹度問題ニ出ルダラウト豫想シテ入學試験準備ノ爲メ特ニ習得シタモノデハアルマイカ



ト思ハレル、近來入學試験準備ノ方法ガ益着實ヲ缺イテ徒ニ零碎ナル知識ヲ收得シ、之ニ依テ僥倖ヲ得ントスルガ如キ傾向ノ盛ナル様ニ見エルガ此ノ實例ハ其ノ事實ノ一斑ヲ示セルモノト云ハレル。

▲第一部 書取 本年ハ朗讀ノ回数ヲ減ゼラレ、訂正ノ時間モ短縮セラレタルニ拘ラズ成績ハ概シテ良好デアツタ、満點又ハ満點ニ近イ點數ヲ得タモノモ尠クナカツタ。

▲第二部 解釋(第二問) 今回、英語解釋問題中難易ノ順序ヲ以テスレハ、三、一、二、四問ト漸次低下シタ。其中自分ノ擔當調査シタ第二問ハ中學卒業生ノ學力ヲ試ムルニ尤モ適シタモノデアツタ。然シ其成績カラ見レバ受験總人員(實數)三千六百餘名中全點(25)ノ半バ(13點以上)ヲ得タモノ九百八十八人、即約三割七分ニ過ギス、而シテ完全又ハ完全ニ近イ答案ハ約十分ノ一ヲ出ナカツタ。此問題中、最多數ニ通シタル誤謬ヲ擧グレバ最難關トセルハ *defeat* ノ字ヲ知ラヌモノ多カツタコトダ、又前後ノ關係ヨリ *General* ノ字義、推測ニテモ大抵解シ得ベキ筈ダノニ種々ニ

曲解シ、特ニ甚シキハ助動詞トシタモノモ少ナクナカツタ又起句ノ *It has been* ノテンスノ意味ヲ表ハシタルモノ一人モナク、皆 *The bird* ト區別シナイ、然シコレハ今日ノ學生ノ多數ニハ期待スベキコトデナイカモ知レヌ、又下半ノ戰爭勝敗ノ數ヲ比較セルヲ誤解シタモノ過半數アツテ、今一例ヲ擧グルノ煩ヲ避ケルガ、要スルニ毎年繰リ返シテ云フ如ク、中學デ英語ノ練習ニ只量ニ重キヲ置キ質ニ注意ヲ怠リ、暗誦習熟セシメザルニ起因スルト考ヘル。

▲第三部 書取 調査中、心付イタ事ハ大體左ノ通りデアツタ。

一、「クオーテーション、マークス」ノ中ニ入ルベキ文句ノ最終ノ語ヲ一行ノ終リニ記シタ時「クオーテーション、マークス」ノ終リノ一部分ヲ次行ノ初メニ記シタルモノ多ク、又一行ノ終リニ記スベキ「コンマ」ヲ次行ノ初メニ記シタルモノ多クツタ事。

一、大文字ト小文字トヲ區別セズ、文章ノ中途ニ於テモ普通ノ單語ニ對シテ自由ニ



大文字ヲ用ユル弊ガアル事。

一、「ピリオッド」ヲ記スニ○ノ如クシタルモノ間々アリ。

一、Words ヲ word トシタルモノ極メテ多シ。

一、are just as true for……ヲ are as just as true for……トセシモノ甚ダ多シ。

一、for the ordinary worldノ意味ヲ解セザリシモノ多カリシガ如シ、否ナ寧ロ之レヲ解セシモノハ至ツテ稀デアツタ。

一、Common ヲ comman トセルモノ及ビ「」ヲ「」トセルモノモ少ナクナカツタ。

一、受験者中、筆蹟非常ニ悪シク、殆ド判讀不能ノ答案ヲ出セルモノアリ、之レハ中學校ニテ大ニ注意ヲ要スルコトト信ズル。

一、不真面目ナル答案ヲ出シタモノアリ、即チ三高ノ某ハ全然書取ニ關係ナキ「friendship……」ニノ一文ヲ書キ、試験官ガ讀ンダ書取文中ノ語句ハ一ツモ之レヲ記サズ又八高ノ某ハ中途ヨリ「Admiral Togo is a Nelson……operation of Ixami-

nation can not」ナドト記シ、且ツ一旦自ラ記シタル受験番號ヲ消シテ書キ直シタル形蹟スラアツタ。

一、本年ノ書取試験問題ハ昨年ノニ比シテ少シク容易デアツタ様ダ、然シ大體ニ於テ好問題デアツタト信ズル、唯讀ミ出シニWhenトアツタ事ハ受験者ニトリテモ試験官ニトリテモ、聞取リ難ク又讀ミ悪キ點デハナカツタカ、現ニ某高校ノ如キデハ受験者ノ大多数ニ「Went Nelson……ト書キ出シ、或ハ Wen Nelson……トナシ、又ハ「Ken Nelson」……トナシタルモアツタ位デアル。云々。

### 數學について

#### C 試験委員

▲第二部 代數(第二問) 氣ガツイタ事ヲ述ベル。

問題ニ「*a, b, c*ガ實數ナルトキ」ト與ヘラル、ニ拘ハラズ此假設ヲ全ク閑却セシ者甚ダ

數學について



多數デアツタコト、及「實數」ナル意義ヲ了解シ得ザル者モ亦多カッタコト。

▲第二部 代數(第三問) 本題ヲ解クニ、概シテ第一方程式ヨリ $\sqrt{x+y} = \sqrt{12}$ 或ハ $\sqrt{x+y} = -\sqrt{12}$ ヲ誘致シ、其後部ヲ放棄シ前部ヲ採ツタ、而シテ其後部ヲ放棄スルニ無斷ノモノ少カッタガ大概ハ其理由ガ明カデナカッタ多クハ

根號内ハ常ニ正ナリ(負トナルコトナキユヘ)、又ハ根號ハ正ヲ表ハスヲ以テト記シ、其他無理式ハ負ナキユヘ、或ハ不能ユヘ、又ハ虚數ナルユヘ、ト記シタモノ少カラス、總ジテ此邊ノ觀念有耶無耶ノ如ク規約的ノ意義ヲ示セルモノハ僅々十數名デアツタ。

▲第二部 代數(第四問) 本問題ヲ普通ニ解ケバ $\frac{1}{2} + \frac{1}{2}i$ ナル假設不用デアルノニ強ヒテ之ヲ附會セントシタルモノ多カッタ。

▲第二部 三角(第一問) 式ノ兩邊ヲ $\sin A$ ニテ割り、 $\sin A = 0$ ニ適スル角ヲ出サザルモノ甚ダ多ク、 $330^\circ$ ト $30^\circ$ トハ同ジ角ナル故ニ其一ツヲ省略ストシタモノ少クナカ

ツタ、甚シキニ至リテハ $330^\circ \parallel 30^\circ$ ト書セルモノガアツタ。

▲第三部 代數(第一問)  $a, b, c$ ガ實數ナリトノ假定ヲ用ツル事ヲ知ラザルモノ、及 $a, b, c$ ガ實數ナルヲ以テ $(a-b)^2, (b-c)^2, (c-a)^2$ ハ各正ナラザルベカラズトシ、 $a \parallel b \parallel c$ ナル終結ヲ得ルニ苦シメルモノ受験者ノ大多數ヲ占メタ。

次ニハ  $a^2 + b^2 + c^2 - ab - bc - ca = 0$  ヲリ直チニ  $a \parallel b \parallel c$ トセルモノ  
 $a^2 + b^2 + c^2 - ab - bc - ca = 0$  ヲリ  $a(a-b) + b(b-c) + c(c-a) = 0$  ヲ導キ之ヲ  
ヨリ直チニ  $a \parallel b \parallel c$ トセルモノ實數ト正數トノ區別ヲ知ラザルモノ

等ハ、答案中ニ甚ダ多ク發見スル事ガ出來タ。

▲第三部 代數(第三問) 數學上ノ約束ト、論理的必然事項トノ區別ヲ、判然ト理解シテ居ラヌモノガ多カッタ。

例ヘバ第一方程式

$$x + y + \sqrt{x + y} = 12$$

數學についで



ヲ解イテ

$$\sqrt{x+y} = 1 \text{ 或 } \sqrt{x+y} = -1$$

ヲ得、之ヲ處分スルニ當ツテ次ノ如クシタモノガ多カッタ。

イ、 $1 + \sqrt{x+y} = 1$ ハ満足セザルガ放棄ツ。

ロ、 $1 + \sqrt{x+y} = -1$ ハ不合理ナル故棄ツ。

ハ、根號ハ正ナレバ $1 + \sqrt{x+y}$ ハ適セズ。

ニ、 $\sqrt{x+y} = 1$ ハ無理數ナル故 $1 + \sqrt{x+y}$ ハ適セズ

ホ、 $1 + \sqrt{x+y}$ ハ明ニ適セザルヲ以テスツ。

ヘ、根號ハ負ヲアラハスコトナキヲ以テ $1 + \sqrt{x+y}$ ハトラズ。

ト、 $\sqrt{x+y} = 1$ ハ(スツ)

自分等ハ委員トシテ二様ノ満點ヲ設ケタ。

イ、 $\sqrt{x+y} = 1$ 前ハ正ヲアラハスコトノ約束ニ從ヒテ「 $1 + \sqrt{x+y}$ 」トシテ以下正解セルモノ。

ロ、 $\sqrt{x+y} = 4, 3$ ヲバ共ニ採用シテ以下正解セルモノ。ツマリ前者ハ「約束」ト云

フコトヲ明確ニ意識シテ論理ガ徹底シ居リ、後者ハ論理的必然事項ヲバ約束ヲ超越シテ處理セルモノデ、同ジク論理徹底シ居レルヲ認メタカラデアアル。

二、因數分解及ビ、方程式解法ノ練習不足セルヲ認メタ。

例ヘバ次ノ如キモノデアアル。

$$\text{イ、 } x+y\sqrt{x+y}=12, (\sqrt{x+y}-4)(\sqrt{x+y}+3)=0, 12 \text{々。}$$

$$\text{ロ、 } x+y+\sqrt{x+y}^2, x+y=144-24(x+y)+(x+y)^2, 12 \text{々。}$$

三、虚數及ビ無理數ノ概念著シク不明確ナルモノ多カッタ事。

例

イ、 $\sqrt{x+y} = 1 + \sqrt{x+y}$ ハ虚數ナルヲ以テ

ロ、 $\sqrt{x+y} = -1 + \sqrt{x+y}$  (虚數ハ不適)

ハ、 $\sqrt{x+y} = 1 + \sqrt{x+y}$ 根號ノ内ハ負ナルコト能ハザルヲ以テ

數學について



ニ、 $\sqrt{x+y} = -4$ , 根號ノ中ハ正ナルベキヲ以テ  
ホ、 $\sqrt{x+y} = -4$ ,  $\therefore x+y = 21$

「根號ノ中」ト「根號ノ前」トノ言葉ノ區別ヲ誤ツタモノモ多カッタ。  
四、計算ノ練習不充分ナルモノ多カッタ事。

例ハバ、 $\sqrt{x+y} = -4$ ,  $x^2+y^2 = 189$  ナル聯立方程式ヲ解クニ、數稍大下ナレルガタメ  
ニ答ノ不正確ヲ來セルモノ、及ビ値ハ正シク出テ居テモ既約最簡ノ形ニ迄導キア  
ラザルモノガ多カッタ。

五、白紙ハ多ク單獨ニ出ズニ、三枚ツヅイテ居タ、零點ニ匹敵スル無意味ノ答案モ  
亦然リデアル。自分等ハ其ノ原因ノ奈邊ニ存セルカヲ知ラナイ。

以上ノ中、第一項カラ第四項マデノ諸缺陷ハ中學校ニ於ケル代數科教授ニ於テ  
ソノ部分ノ不徹底ナルニ基クモノカト思フ。

▲第三部 三角(第二問) 此問題調査中、殊ニ自分ノ注意ヲ惹起シタノハ左記ノ諸

點デアッタ。

(1)  $30^\circ$ ,  $60^\circ$ ,  $180^\circ$ , 等ノ圓過數ノ數值ヲ確知セザルニモ拘ラズ、反テ  $18^\circ$ ,  $36^\circ$ , ノ  
如キ角ノ圓過數ノ數值ヲ暗記シ、又ハ暗記セント勉メ居ル者多數デアッタコト。  
之ハ急ギ學修セル結果デモアラウガ、教授ノ際其輕重ヲ示サザルニ因ルモノデア  
ラウ。

(2) 問題ガ角ハ其數值ニテ與ヘ、問ヒガ問ヒナルニモ因ルノデアラウカ、答ヲ得  
ル前ニ尙ホ簡單ニスル餘地ノ多クアルニモ拘ラズ之ヲモ勉メズ只先ヲ急イデ計算  
的ニトモカクモ答ヲ得ントアセル者ノ多イコト。  
之レ初學者ニハ止ムヲ得ヌ事ト言ヘバ言ヒ得ルモノノ、教授ノ方針ニ基因スルコ  
トモ多イコト、信ジラレル。

(3)  $A \times (-B)$  ヲ  $A \times B$  ト記シタ者ノ多イコト。



# 歴史に就いて

## D 試験委員

### ▲第一問 地理から離れた歴史の教授

今年の歴史問題はいづれも中學卒業生としては皆必ず知り居る筈のもので、穩當と思はるゝが、殊に此第一問の如きは、必要なる常識の有無をも窺ふことの出来るもので、調査は複雑だが、興味の伴つたものである。

全體として著るしいのは、由來に關する知識はいづれも相當に有つて、地圖の方が至つて貧弱な事である。是は斯かる種類の問題を豫想しなかつた事も一の理由であらうが、一は歴史教授が地理から離れて居るといふ消息を暴露したものと見ることも出来る。大勢の中から二三の奇現象は免れ難いにしても、

一、朝鮮及び亞細亞大陸を我が帝國の東に描けるもの、

一、朝鮮を島となせるもの、

一、朝鮮を全く描かざるもの

が夫々二三宛あつたといふ事は、どうしても中等教育全般の不面目といはねばならぬ。尙

樺太を大陸續きに描けるもの、

これも四五十位ほどの高等學校の受験者の内にも見受けた。

次に

(一) 遼東半島と山東省とを朝鮮の北に於て突出せしめたるもの、

(二) 遼東半島だけを朝鮮の北に置くもの、

(三) 樺太を北海道の西に描くもの、

(四) 南洋に於ける帝國の占領諸島を臺灣の西南に描くもの(甚しきは印度の西南) 斯かる突飛なものが少くない位であるから、地圖の内に大體の經緯度をも描かない

歴史について



といふが如きは異むに足りない。併し樺太の國境を南緯五十度と書けるもの可なり多かつたには、予輩も全く恐縮したのである。總て地圖に親しみが無いものだから、描法の拙劣なること言語道斷であつて、小學兒童にも及ばざる者恐らく半を以て數へてよからうと思ふ。されば北海道を缺いて直ちに樺太を加へるといふが如きは、是も一人や二人でない。

斯く地理的觀念の欲如は微細なところにも遺憾なく現はれて居る。

膠州灣の膠は概ね膠・濇・又は廣・杭・興・黎・膠。

遼東は領東・浪東・陵東・僚東・寮東・繚東・遼島・遼東・兩東とあつて殆ど正確な文字がない。

緯度の緯は偉・違・が一番多くして外に韋園などもある。此程度であるから、是よりも特殊な固有名詞になると、誤りの多いこと驚く許りである。又面積の大體的比較が出来て居ない。臺灣を無暗に大きく、而して樺太を極めて小さく書くといふ類が甚だ

多い。

要するに予輩は調査の結果として、中學教育の歴史教授に於ける或欲陥を遺憾なく知悉したやうの氣がするのである。

▲第二問 儒教に對する無理解と無識

毎年東洋史に關する答案は最も不良なるを例とするが、本問題に就きては白紙を出したるもの、又出鱈目を書きしもの若干を除きては、程度は兎もあれ、之に對する答案を作りたる者多く、唐代との混同も豫想せる程にはなかつた。只此答案を調査するに當り、重要な一般的無識を發見したるが故に、特に此一點を指摘して、中等教育者の考慮を請はうと思ふ。それは即ち「儒教」なる語の誤解である。多數の受験者は儒教を以て一の宗教と見做して、程子・朱子・陸象山等の儒學者を知る者も、之を文學又は儒學の項に録して、別に儒教の事を記し、之には信仰・尊崇・歸依・僧侶・國教・寺院等の文字を使用し、儒教を以て佛教・道教・景教・回教・等と類伍せしめる。中には儒教



を單に宗教といふ義に解して説明せる者もある。是れ畢竟「教」の字に中毒せるもので支那史及び支那學の知識に淺薄なる受験者は、「教」なるが故に、佛教回教の同類であらうと誤解したものである。儒教といふも、儒學といふも、或は儒道といふも、等しく孔孟の教を指すものたる位は、中學卒業生としては皆知得して居らなければならぬ。儒教は今日獨り支那人の所有物でなく、我國民にも同じく大切なるもので、我等東洋人の道德思想の源泉である。然るに中等教育を卒りたる我國民の多數が、儒教を以て漫然佛敎道教等の類となすが如きは、普通の史上の事件を知らざるとは同日の論でない。又決して獨り歴史敎授上の問題に非ずして、國民道德のため、將た東洋文化のために、觀過する事の出來ぬ大事件であると思ふ。望むらくは中學校に於て歴史敎授又は修身講話の際、其意義を充分説明して、斯の様な寒心すべき謬見を一掃して貰ひたいものである。

人名には宛字又は假名を用ひし者大多數で、稀に正字の人名の列なるを見た時は、却て異様な感があつた程であつた。歐陽脩と王陽明との混同に至つては實に無數、其他の誤謬は茲に述べない。

▲第三問 出來の惡かつたは三國同盟

此問題は最近の事蹟に屬し、中學校では學年末に至り授業時間が缺乏したため、三帝會合の邊で切り上げたものが多かつたと覺しく、全く答ふること能きなかつた者も少くなかつた。立派な答案も勿論相當あつたが恐らく、歴史科五問中に於ては最も成績不良であつたもの、此第三問であつたらう。

多くの者は、三國同盟を以て三國協商に對抗するため而起りたるものと爲し、全く歴史の順序を顛倒して居た。又多くの者はビスマルクが佛國の雪辱戰に備ふるためと爲し、對露關係を全然闕如して居る。又或は三帝會合と混同せる者も少くなかつた。之を要するに、現時の協商側對同盟側の戰爭より想像を逞うし、史的事實に頓着せず、前後の關係を無視し、新聞雜誌に依りて得たるウロ覚えを基礎となして、文章を



粉飾し、或は外交を論じ、或はビ公の偉大なる手腕を述べ、チエール出で、ガンベツ  
夕出で、甚しきに至りては、モルトケ・ビクトルエマニエル・ナポレオン一世等ま  
でが出で来て、採點に苦んだ答案多く、簡單明瞭に問題の要求する答を爲したるもの  
極めて少かつた。

▲第四問 林藏を描き間宮海峡を逸す

概して成績良好であつた。

(イ) 間宮林藏——北邊の探検者たることは之を記する者多かつたが、近藤重藏の  
事蹟と混同する者多く。又間宮海峡の探検者發見者たることを記したるもの比較的  
少数であつた。

(ロ) 房玄齡——時代の錯誤最も多く、唐の太宗を或は漢代或は宋代或は明代の英  
主となし、之を輔佐したる宰相としたるもの多く見當つた。

(ハ) ロヨラ——之れも時代の錯誤甚だ多く、宗教改革を以て或は中世或は十八世

紀十九世紀など、せるもの少からず。又エスイタ團體の眞の性質目的等を了解せ  
るものは極めて僅少で、殆ど皆ヤソ會(エスイタ團體)を以て舊教を改革せる一  
派なりとし、甚しきはロヨラはエスイタ教を創めたり、或は天主教を開きたりな  
ど、記したものがあつた。

▲第五問 正倉院と宇治の平等院の混同

(イ) 正倉院——位置を京都又は宇治と誤つたるものが多い。宇治とあるは多分平  
等院と混同したものであらう。又其れが現今帝室の管理に屬するを知らざるもの  
も多かつた。又正倉院が聖武天皇や光明皇后の御物を藏するといふ點に重きを  
置かず、單に古き美術的建築物なるが如く考ふるもの少くなかつた。

(ロ) バグダード——先づ位置につきての最も普通なる誤りは、之を中央亞細亞、  
或は小亞細亞、或はアラビヤに在りと記したことである。又漠然チグリスエウフ  
ラテス河畔に在りと記して、此二河が恰も一の大河なるが如き書き振りをなせる



ものも多い。次に史實上の誤解についていへば、バグダード鐵道を以て露國の計畫なりとし、獨逸の小亞細亞メソポタミヤ發展について考へ及ばぬものも少くない。此都會がサラセンの都たりしはアツバス朝の時であるに、之をオムマヤ朝の時なるかの如く考へ、或はムハメッドの時から直に此處に都を奠めたる如く思へるものも尠くない。バグダードが西班牙國に在りと記したもの、多數を占めた事は畢竟オムマヤ朝の首府であると誤信したるに基づくものであらうか。

(ハ) アウステルリッツ——其位置をフランス又はプロシヤに在りなご、記した誤は論外としても、之を現今の獨逸の中に在りとするもの多かつたには、大に當惑した。次に史實上の誤についていへば、ナポレオン一世に對せる聯合軍を埃露聯合軍とせずして普埃聯合軍となし、或は單に埃軍とのみ記せしもの甚だ多く、其他七年戰役中の戰場・ワグラムの役・ワوترローの役の戰場など、記し或はイエナ・アウエルスタットと誤り、其年代を一千八百〇六年とした者の多か

つた事である。人名については、埃帝をフランシスヨセフ・フェルチナンド・マキシミリヤンなどしたものが多く、露帝をニコラスとなすもの多かつた。又アウグスブルグ宗教會議と誤り、長々と宗教改革時代の事を記述したものが多數であつた事には一驚を喫した。凡て受験者の通弊として、問題の核心を捉へずして、中心點に達するまで、道行を長々しく記し、最後に中心點を簡叙するもの、全受験者(歴史)の半以上に達した様である。

### 物理に就いて

#### Ⅱ 試験委員

▲第二部及第三部 (第一問) 問題ノ事柄ガ、教科書ニ其ノママニ明記シテナイカラ解答ハ頗ル多岐ニ亘リ、兎ニ角ニ意味ノ通ズルモノダケデ分類シテ見タラ二十二程モアツタデアル。OGS 單位トイフコトハ大抵ハ知ツテ居ツタガ、稀ニハ習ハナカ



ツタト記シタノモアツタ。(田丸氏教科書ノ如キニハ此學位ノ名ナシ。)

便利ナル點トイフコトニ對シテ、數多ノ項目ヲ雜然ト書キ並べ、夫等ガ互ニ撞着スルコトヤ、或ハ結局同一意味ノコトニナルコトナドニ無頓着ニ只澤山ノ箇條ヲ竝ベテ置ケバ其中ドレカガ當ルダラウトイフヤウナ式ノモノガ十中三四マデモ見受ケラレタノハ甚ダ面白カラヌ現象デアアル。

次ニ答案ノ内容ニツイテ分解シテ見ルト。

C、G、S單位デハ長サ質量ノ表ハシ方ガ十進法ニナツテキルコトノ便利デアアルコトヲ答ヘタモノハ少カツタ、(之ハ寧ロ十進法デナイモノガアルコトヲ知ラナイカラ氣ガ付カヌノカモシレヌ)。

水一立方糎ノ質量ガ一瓦デアアルコトハ百中九十七八迄ハ記憶シテキタ。處ガソレカラ適確ナ解答ヲ導キ得タモノハソノ半ニモ達シテキナイコトカラ考ヘルト、ソノ中ノ多數ハ單ニ孤立シタ記憶トシテ所有サレテキルニ過ギヌト見ネバナラヌノハ遺憾ナコ

トデアアル。

「萬國共有ノ單位ナル故便利デアアル」トイフノハ半面ノ理ヲ含ムガ「習慣上便利デアアル」トイフノデハ似テ非ナルモノトイフベキデアアル。此等ノ答案ハ孰レモ多數ニアツタ。

最多數ヲ占メタ答案ハ密度ト比重トノ數値ガ一致スルコトヲ擧ゲタモノデアアル。

「絕對單位ナル故地球上ノ位置ニ無關係ナリ」

「單位ノ大サ小ナル故コレヲ以テ度レル各ノ量ノ數値大トナル」

「如何ナル他ノ單位ヲモ組合スルヲ得」

「比例常數ヲトナス」

等單ニ學問上ノ用語ヲ竝ベタニ過ギナイト評スベキモノガ少クモ數十ツツモアツタ。

又一ツ一ツヲ取レバ正當ナコトデハアルガ、

「水ノ密度ガ1ナルコト」



「水ノ質量ト體積トノ數値ガ一致スルコト」

「質量ガ比重ト體積トノ積ニ等シキコト」

等ノ項目ヲ竝べ立テテ此等ガ何レモ別々ナコトデアアルカノ様ニ見セテアルノガ甚ダ多クアツタガ、ソレハ受験者ノ多數ガ教科書ノ鵜呑ニ長ジテ推理力ニ乏シキコトノ一斑ヲアラハシタモノト見ラレル。

後半ノ計算ノ分ノ解答ハ寧ロ成績良好デアル。

計算ノ理由ヲ記シタモノハ甚ダ少ク、稀ニ説明ヲ試ミタモノハ往々誤解又ハ不得要領ニ終ツテキタ。問題ニ「計算ノ理由ヲ詳記スベシ」トイフ但書ヲ加ヘテ置イタナラバ學力ノ區別ヲ付ケルノニ一層都合ガヨカツタラウト思ハレル。シカモ珍解答ガ澤山出タラウト思ハレル。

計算ノ誤リハ大抵體積ノ計算ノ誤リデ質量ノ單位ノ誤謬ハ少カツタ。

米立方ヲ立方メートルト同ジモノト解シタモノガ可ナリ多數アツタ重力單位ニ關シテノ誤

解者モ多クアツタ。即チ「水一立方糎ノ重サハ一瓦ナリ、從テ $8 \times 10^3$ 立方糎ノ重サハ $8 \times 10^6$ 瓦ナリ、從テ質量ハ $\frac{8 \times 10^6}{9800}$ 瓦ナリ」トイフ意味ノ答案ガ數十モアツタ。處ガ一方ニ於テ「然ルニ質量ハ重サニ正比例スル故 $8 \times 10^6$ 瓦ナリ」ト結論シタモノハ結果ニ於テハ成功者デアアルガ實質ニ於テハ前者ト比ベテ甲乙ナシト斷ズル方ガ妥當デアアルマイカ。

答ニ數ノミヲ舉ゲテ單位名ヲ書カナイモノモアツタ。

密度ヲ言ヒ表ハスノニ十中八九迄ハ水ノ密度ハC、G、S單位ヲ用フレバ一瓦ナリトイフ文句ヲ用ヒタ。シカシソレラノ多クハ密度ノ意味ガ質量ト異ナツテキルコトハ知ツテキルガソレノ適當ナ言表シ方ヲ知ラナイ爲メラシイ。此等ノ點モ中學校ニ於テ注意セラレンコトヲ望ム。

水ノ質量ノ計算ヲ落シタモノガ少クナカツタ。水ノ字ヲ見落シタ爲メデアラウカ。誤リノ實例ヲ舉ゲレバ



2 米立方  $\parallel$   $(200)^2$  立方糶

$\parallel$  4000000

2 米立方  $\parallel$  20000000

2 米立方  $\parallel$  200 立方糶

2 米立方  $\parallel$   $(200)^2$  立方糶

トシナガラ、其先ヲ

$\parallel$   $(2000)^2$  立方糶

トシ、又ハ

$\parallel$   $(20)^2$  立方糶

トシ、又ハ

$\parallel$   $(20)^2$  立方糶

又ハ

$2^5 \times = 100$

トシタモノモアリ。

$200^2 = 20000000$

トシタモノモアツタ。

▲第二部及第三部(第二問) 此問題ハ其内容ガ多岐ニ分レ、且ツ之ガ解答ニ要スル智識ニ種々ノ階段ガアルカラ、選抜試験問題トシテハ適切デアラウト思ツテ居タトコロ、實際調査ノ結果モ全ク豫期ニ背カナカッタ。

調査ニ先ダチ本問ノ内容ヲ左記、

(1) 地面ニ接スル空氣ノ熱セラル、模様

(2) 其空氣ノ昇騰スル理由

(3) 空氣ハ直接ニ太陽ノ輻射線ニヨリ熱セラレズ、之ヲ吸收シテ熱セラレタル地面ニ接觸シテ熱セラル、コト、即チ空氣ノ透熱體ナルコト

物理に就いて



- (4) 昇騰スルト共ニ冷却スル理由
- (5) 雲ヲ生ズル理由

ノ五項ヲ分ケテ特ニ(3)(4)ニ重キヲ置イタ。調査ノ結果採點ニ差等ヲ與ヘタノハヤハリ此(3)(4)項ガ主デ(1)ガ之ニ次ギ(5)ニツイテハ入選人數ノ數倍以上ガ同様ノ點ヲ得タ。答案ヲ上ノ五項毎ニ分類シテ見ルト。

- (1) 地面ニ接スル空氣ハ單ニ
  - (A) 熱セラレテ密度小トナリ(二部デハ此分大多數)
  - (B) 地面ヨリ發スル輻射線ヲ吸收シテ熱セラレ(多數) (三部デハ此分最多數)
  - (C) 對流ニヨリ熱セラレ (少數)
  - (D) 對流及傳導ニヨリ熱セラレ(少數) (中ニハ單ニ傳導ニヨリテ熱セラレルトシタノモアツタ)
- ノ四通ニ大別サレタガ、(B)ハ(4)ノ冷却スル理由ト撞着スルモノデアアルカラ受験者ノ

物理的觀念ノ有無ヲ檢スルニ好箇ノ着目點デアツタ。

- (2)(A) 密度小トナリ輕クナリテ上昇ス (二部デハ此分大多數)
- (B) 密度小トナリ對流ニテ上昇ス (可ナリ多數)
  - (二部デハ單ニ對流ニヨルト答ヘタモノガ最多數)
- (C) 密度小トナリ又水蒸氣ヲ含ミテ輕クナリ浮力ニテ上昇ス (少數)
  - 一旦上昇スルト壓力ガ減ジ密度ガ小ニナルカラ上方デ冷却シタ空氣ハ水ノ場合ノ様ニ下層ニ下リテ來ナイトイフコトヲ書イタモノハ一ツモナカツタ。
- (3) 多數ノ答案ニハ此事項ニツイテノ記載ナク、且ツ(1)ノBト(4)トノ矛盾ニ氣付カナイデ居ル。

- (4) 此項ニ關シテハ初メ或ハ中學程度外デアラウト考ヘ「空氣ガ上昇スルト共ニ輻射ニ依ツテ冷却スル」位ヲ最高標準トシテ、外壓ニ抗スル仕事ノ爲メニ熱ヲ失フ事ニ對シテ點數上多少ノ餘裕ヲ存シテ置イタノデアアルガ調査ノ結果ハ意外ニモ此項ニ關ス

物理に就いて



ル物理的觀念ヲ有スルモノガ少クナカツタノデ採點ノ標準ヲ變ヘルコトニシタ。中ニハ斷熱的膨脹トイフ語ヲ使ツタモノサヘアツタ。

- (A) 地面ヨリ遠ザカル故ニ冷却(多數)
- (B) 周圍ノ冷氣ニ冷ヤサレテ冷却(多數) (三部デハ此分大多數)
- (C) 輻射ニ依リテ冷却(多數)
- (D) 外壓ニ對スル仕事ノ爲メ冷却(少カラズ)
- (E) 液態空氣製作ノ原理ニヨリ(少數)
- (5) 露點ノ字句ヲ用ヒタモノト然ラザルモノトガアツタケレドモ大多數ハ此項ニ對スル物理的觀念ヲ有スルモノト認メラレタ。中ニハ塵埃ヲ中心トシテ水滴ノ出來ルコトヲ示ス實驗ノコトヲ引用シタモノモアツタ。又「イオン」トイフ語ヲ用ヒタモノモアツタ。

次ニ誤謬ノ實例ヲ舉ゲル。

密度トスベキヲ質量ト書イタモノガ多クアツタ。

例「空氣膨脹シテ質量少クナリテ昇騰ス」

何レモ少數デハアルガ次ノ様ナモノモアツタ。

「空氣蒸發シテ輕クナリテ上昇ス」

「空氣氣化シテ輕クナリテ上昇ス」

「空氣蒸氣トナリテ上昇ス」

「空氣熱セラルレバ密度ヲ増ス故ニ輕クナリテ上昇ス」(數人アリ)。

「空氣ハ地面ノ爲熱ヲ吸收セラレテ上昇ス」

空氣ハ透熱體ナルガ故ニ太陽ノ輻射線ニヨリテ熱セラレザルコトヲ最初ニ言ヒナガラ、後ニ地面ヨリノ輻射線ニヨリテ熱セラルルコトヲ書イタモノガ甚ダ多クアツタ。

熱ト温度トノ區別ヲ知ラナイモノガ數人アツタ。

「熱ノエネルギーガ上昇スル時ノ運動ノエネルギートナリ冷却ス」ト答ヘタモノガ數



人アツタ。次ノ様ナノモアツタ。

「蒸發熱ノ爲熱ヲ奪ヒ去ラレテ冷却ス」

「含有セシ水蒸氣ニヨリ熱ヲ吸收セラレ空氣冷却ス」

「吸收セル輻射熱ヲ潜熱トシテ出スヲ以テ冷却ス」

「地軸熱ニヨリ冷却ス」

「氣化ノ潜熱ノ作用ニヨリ雲トナル」

「壓力ヲ加ヘラレ溫度ヲ下ラレ空氣液化シ雲トナル」

「比重零トナリ雲トナル」

「露點攝氏零度ニ達スル時雲ヲ生ズ」

「空氣冷却シテ水蒸氣トナリ、ナホ冷却シテ雲トナル」

「氷點以下ニナレバ水蒸氣ハ水滴トナル」

「潜熱ヲ生ズル時ハ少量ノ水ヲ生ズ」

「臨界溫度ニ達シテ凝結ス」(此種ノモノハ稍多クアツタ)。

誤字ノ實例

復射<sup>△</sup>、輻射<sup>△</sup>、副斜<sup>△</sup>、逼射<sup>△</sup>、偏射<sup>△</sup>、隔車線<sup>△</sup>、彌張<sup>△</sup>、澍<sup>△</sup>、澎<sup>△</sup>、脚<sup>△</sup>、彭<sup>△</sup>、腋<sup>△</sup>(ポーチ  
ヨート假名デ書イタノモアツタ)

抱和<sup>△</sup>、泡和<sup>△</sup>、胞和<sup>△</sup>、

蜜度<sup>△</sup>、

冷脚<sup>△</sup>、

不良動態<sup>△△</sup>、

第二問ノ調査ノ結果カラ概評スレバ

(一) 成績ハ好良デアル、物理學的智識ノ進歩ヲ認メル。

(二) 誤字ノ多イ答案ノ少クナイコト。

(三) 自分ノ思ツテキルコトヲ言ヒ表ハス作文ノ力ノ不充分ナルコト。

物理に就いて



▲第二部及第三部(第三問) 問題ソノマ、ノコトヲ中學校デ習ツタ筈デアルノニ關ハラズ徹底シタ答案ハ存外ニ少ナカツタ。

大多數ハ「サイレン」ヲ用ヒテ測定スル方法ヲ記シタ。

シカシ「サイレン」ノ構造ノ詳シイ説明ヲシナガラ如何様ニシテ測定ニ應用スベキカラ記シテナカツタノガ可ナリ多クアツタ。

「下ノ孔カラ音ヲ送り込ム」トイフ意味ノモノガ二千ノ中ニ三十三モアツタ。

サイレン盤ノ孔ノ數ヲ「無數ノ孔」ト記シタモノガ二千ノ中ニ二十七モアツタ。尤モ初メノ方ニ無數ト書イタモノガ後ニハイツノ間ニカ $m$ トカ $16$ トカナツテキタノモアツタガ無數ノマ、デ終ツテキタモノモアツタ。(此ハ受験者ノ獨創デハナク、ドコカカラ受繼イデ來タモノカモ知レナイ)。

音ノ振動數ヲ音ノ強弱ニ依ルトシタモノガ二千ノ中ニ二十四モアツタ。

「サイレン」ノ名ヲ忘レテ「サイホン」其他ト間違ヘタモノガ二千ノ中ニ三十一モアツ

タ。

「サイレン」ヲ鳴ラシテ測ルベキ音ト高サ(或ハ調子)ヲ等シクスルト明記スベキ處ニ單ニ等シキ音或ハ同音ニスルト書イタモノニハ何レモ減點シタ。

兩者ノ振動數ガ等シクナルマデト記シタモノモ少數アツタガ、ソノ振動數ヲ等シクスルニハ如何ニスベキカラ附加ヘナケレバ問題ノ答ニハナラナイ。

「サイレン」ノ圖ヲ畫イタモノノ中デ大抵ノモノハ廻轉盤ノ心棒ダケデ廻轉數指示裝置ノ全部ガ支ヘラレテキル圖ヲ畫イテキタガ、ソレハツマリ自分デ器械ノ作用ヲ考ヘテ見ナイカラデアラウ。

廻轉盤ノ廻轉數ト孔ノ數トカラ音ノ振動數ヲ求メル例トシテ大抵ハソレラノ數ヲ

$m$   $n$  等ノ文字デ表ハシテキタガ、ソノ數ヲ兩方トモ十六トシテ求ムル振動數ハ  $16 \times 16$

ニナルト記シタモノガ二千ノ中ニ四十九モアツタ。之モ其場デ思付イタコトトハ考ヘラレナイ。鶴呑的學習ノ產物トシテ見ルベキモノデアラウ。



「サイレン」ノ構造殊ニ孔ノアケ方ノコトナドハ大多數ノモノガ充分會得シテ居ルト認メラレタ、(尤モンレヲ記述シタ文句ソノママデ誰ニデモ構造ガ了解サレル様ニ作文シ得タモノハ極少數シカナカツタガ)カヤウニ細カイ部分ノコトヲ知ツテキル割合ニ最モ肝要ナ點(例ヘバ如何様ニシテ測定スベキカヲ脱カシテ居ルモノガ多イトイフコトハ考ヘナケレバナラヌコトデアラウト思フ。

「サイレン」氣柱、記録法、波長ト速サ、絃ノ振動等ノ中カラ三種位ヲ採ツテ番號ノ付ケテ竝ベタ處ノ體裁ノ一様ナ答案ガ二千ノ中デ五十組モアツタ。之ハ大抵ハ受賣的ノモノト見ルベキデアルトイフコトハ體裁ノ割合ニ内容ガ徹底的デナイコトカラ判斷サレル。

絃ノ振動數ノ公式ヲ記シタモノモ可ナリ多數ニアツタ。カヤウナ公式マデ詰込ンデキルコトハ物理學ガ詰記的學科トシテ取扱ハレテキルコトノ一ツノ證據ト考ヘラレルココニ詰込ンデキルトイフ言葉ヲ使ツタ理由ハ、ソレラノ中ニ公式ノ形ガ間違ツテキルモノガアル、公式ノ中ニ使ツテアル文字丈ケ見ルト正シイ様ニ見エルモノデモ、ソレラノ文字ガ何ヲ表ハスカノ説明ガ間違ツテキルモノガアル、間違フ方ガ尤デアルト思ハレル位複雑ナ形ノモノデアルカラデアアル。タマタマ公式ガ正シク書イテアルモノデモ實際此問題ニ役立テ得タモノハ極メテ少數デアツタ。ソノ譯ハソノ公式ヲ如何ニ用フベキカトイフコトガ書イテナクテハ與ヘラレタ問題ノ解決ニ向ツテ一步ヲ進メタモノトシテ取扱ヒ得ナイカラデアアル。

氣柱ノ共鳴ヲ應用スル方法ヲ説明シタモノノ方ニ絃ノ場合ノモノヨリモ要領ヲ得テキルモノガ多クアツタノハ公式ガ簡單デアアルカトイフバカリデハナク多分中學校デ實驗ヲ見セラレ或ハ實驗ヲサセラレタコトガアルカラデアラウ。尤モ此分ニモ難ハアル即チ單ニ氣柱ノ振動數ノ式ダケヲ記シテソノ氣柱ノ共鳴ヲ音ノ振動數ノ測定ニ對シテ如何様ニ應用スベキカヲ記サヌモノガ可ナリ多クアツタ。ソノ式モ閉管ノト開管ノトヲ二ツ並ベテ記シチガラ取違ヘテ居タモノガ多少アツタ記録法ヲ擧ゲタモノノ中デ著



音機ノ原理ヲ應用シタモノモ少數アツタガ、多クハ圓筒面ニ紙ヲ卷付ケンノ上ニ發音體ノ振動ヲ直接ニ記サセル流義ノモノヲ記シタノデアアルガ、此方法ハ一般性ヲ缺イテキルカラ頭ノ良イ受験者ハ初メカラ之ニ觸レナカツタトイフ關係モアラウガ、ソレノ説明ノ大部分ハ不満足ナモノデアツタ。

誤ツタ答ノ實例ヲ擧ゲレバ、

「上下兩孔ノ合スルトキハ音モツトモ高クシテシカラザルトキハ低シ」

「穴ト穴トガ合シタルトキハ空氣ガ密ニナリテ振動數大トナリ互ニ入リスレタルトキハ空氣疎トナリ振動數小トナクナル」

「圓削<sup>△</sup>ガ一秒間ニ回轉スル回數ト圓削ニアル小孔ノ數トノ比ヲ取レバ此ノ比ハ其音ノ振動數ヲ表ハス」

「廻轉數ヲmトシ指針ノ目モリガnナル時ハ其樂音ノ振動數ハmnヲ以テ表ハサル」

「上蓋ノ小孔數ヲmノ其上ノ圓盤ノ小孔數ヲnトセバ一回轉毎ニmnノ振動數ヲ得」

「疎密ノ數ト孔ノ數トノ相乘積ハ則チ其ノ音ノ振動數トナル」

「音ノ高サハ音ノ振動ニヨリテ生ジタル圓ニ反比例ヲナス故ニ其ノ半徑ノ二乗ニ反比例ヲナスナリ」

「音ノ振動數ヲ測定スルニハ音ノ高依<sup>△</sup>ニヨリテ之ヲ測ル、今假ニ鐘ノ振動數ヲ測定セントセバ鐘ヲ輕ク打ツテ是ニ低音ヲ出サシメ是ノ時ノ振動數ヲ測リ置キ然ル后鐘ヲ強ク打チテ其音ノ高サヲ測リ前ノ音ト後ノ音トノ比ヲ求ムレバ可ナリ」

「サイレン」ト同調子ニ共ニ共鳴スル閉管氣柱ノ振動數一（負號ナラン）穴ノ數ヲ四倍スルコトニヨリ其ノ振動數ヲ測定スルコトヲ得」

「音ノ測度ヲ測定シソノ音波ニテ除スベシ」(三例アリ)

「波長トシンブクトノ間完全ナル比ヲナシテ居ルヲ以テ」  
誤字ノ實例、

高低ノ低<sup>△</sup>ノ字ハ例年ノ選抜試験ノ時ニモ誤ガ多ク又既ニ入學シテ二年三年ニナツタ



モノデモ間違ツタ字ヲ書クノヲ見受ケルコトガアルガ餘程覺エニクイ字ト見エル。

疎密ノ疎ノ字モ同様デ、假名デ書イタモノガ多數デ疏、棘其他不思議ナ書ノ字ヲア  
クハメタモノガアツタ。密ノ代リニ蜜ノ字ヲ書イタモノモアツタ。

空ノ字ト穴ノ字ヲ混同シタノハ二千ノ中二十位アツタ。

秒ノ代リニ秒ト書イタモノガ二千ノ中ニ六人アツタ。時間ノ限ラレタ試験ノ際ニ却  
ツテ書ノ多イ字ヲ書クノハ、

「音ノ高サ」ト書クベキ處ニ「高ノ音サ」ト書イタモノト同様受験ノ際ニ起ル變態心理  
ノ一例デアラウカ。

波張、波調、發長、振副、氣中、器柱、側定、速定。

随分便利ナ宛テ字ヲ使用シテキルモノガアツタ、例ヘバ

開閉スル如ニ。孔ヲ防ゲル。程ンドノ類ハ一時的デハナク平常カラ用ヒテキルノカ  
モシレス。

最モ普通ニ使ハレル假名ヲ違ヘテキルソノ中ニ多數アツタノハ、

「先ズ」二千中十二、

「出ズル」二千中十三、

▲第二部及第三部(第四問) 最後ノ解答ニ達スルモノハ無イカモ知レスト思ハレタ  
ガ立派ニ答ヘタモノモアツタ。

「像ハ何々米ノ距離ニアリ」トノミ記シ、ソレガ何ヨリノ距離ナルカ又ソレノ前方ナ  
ルカ後方ナルカヲ明記シテナイモノガ多數ニアツタ。

「平面鏡ナルガ故ニ像ハ虚ナリ」トシタモノガ多數ニアツタ。レンズノ焦點距離、光  
點トレンズトノ距離、平面鏡トレンズトノ距離ノ與ヘラレタ値ガアマリ簡單デアツタ  
爲メニ正シイ答ヲ記シタモノデモ果シテ能ク其ノ理由ヲ了解シテ居タノカ否カラ判別  
シ難カツタ答案ガ數多クアツタ。

記號ノ意義ヲ了解セズニ居テ漫然公式ヲ弄シタルニ過ギザルモノガ數多クアツタ。



用語ノ無意義ナル例ノ中デ數多ク見受ケタモノノ中著シイモノヲ舉ゲレバ

レンズノ對稱點(共軛點ノツモリ)

レンズノ半徑又ハ曲率半徑(焦點距離ノ二倍ノツモリ)

レンズノ鏡心(中心ノツモリ)

▲第二部及第三部(第五問)「感應電流ハ「コイル」内ニ磁石ヲ押シ込ム際ニ起ル亦

「コイル」内ノ磁場ガ變化スル時ニモ起ル」トイフ様ニ磁場ノ意義ヤ其變化ノ意義ヲ理解シナイデ只書キ並ベタモノガ多クアツタ。

「コイル内ニ軟鐵棒ヲ挿入云々」トシタモノヤ、全ク磁氣感應ト間違ヘタモノモ多クアツタ。

靜電感應ト間違ヘタモノモ多クアツタ。從テ電場トイフ語ヲ使ヒ、電流ノ通ル「コイル」ト云フベキヲ帶電體トカ帶電セル「コイル」等ト書イタモノガ多クアツタ。

靜電感應ト混同シタモノモ多クアツタ、靜電感應ノ説明ヲシテ置キナガラ器械ノ例

ニハウイムシャルスト起電機ト並ベテ發電機(ダイナモ)、感應コイルヲ舉ゲタモノモ可ナリアツタ。

言ヒ表ハシ方ノ不精密ナ例トシテ、

「コイル」ヲ磁針ニ連續ス」トイフ様ナモノガ甚ダ多ク。

「コイル」ノ一端カラ一本ノ線デ磁針ノ下ニ連結シタ圖ヲ畫イテアツテ、電流ノ通シ方ガ解カツテ居ナイト見ルヨリ外仕方ガナイ様ナノモアツタ。是等ハ單ニ教科書ノ解釋ヲ聞イタダケデ實驗ヲ見ナカツタ爲デアラウト思ハレル。

感應電流ノ方向ヲ表ハスノニ、

「電流ノ方向ヲ妨グル方向」

「磁石ニ反對ノ方向」

「磁場ノ方向ヲ妨グル方向」

「磁力ノ運動ヲ妨グル方向」

物理に就いて



「磁石ヲ出入セル方向ト同方向若クハ反對ノ方向」

等ノ語ヲ使ツタモノガ甚ダ多クアツタ。

應用器械トシテ次ニ記スヤウナモノヲ擧ゲタノモ多クアツタ。

電信機、繼電器、感應起電機、電磁石、電鈴、アンペア針、蓄電池、熱電堆、X光線等、

文字ノ誤リニハ

發電氣、「ダイナマ」號ト記シタモノガアツタ。

點數ノ統計

問題毎ニ點數ノ散ラバリ方ヲ計算シタモノヲ表ニ作ツテ見タラバ次ノ様ニナツタ。但シ全部ノ統計ヲ作ル時間ガナカツタカラ三部志願者ダケデヤツテ見タノデアアル。

(本記事、五委員の談は、各委員の文部省に報告したる報告を副語體に改めしものなり)

### 力の自覺と諦める人々

いくら努力しても、所詮出来ないものは出来ないといふ人がある。而して、それに對して言ふ先輩の言葉は多くの場合、單なる激勵の言葉である。那麼ここでへこたれて如何するんだ、やれ〜と勸める、然し、それも最初の一年はいゝ、二年三年となつて失敗の暗い影が纏はりついて離れぬ人々へは、激勵の言葉も月並のものとなつて相互に何等の波動も起さない、常習(?)となつては力の弱いものである。激勵があればあるだけ、受験生の意氣は却つて銷沈する。激勵する人は眞に激勵して居るのでも聴く耳からは反語を聞くの心地である。激勵して居る人自身も馬鹿らしいと思ひつゝ、口に獎勵の言葉を表はして居るものに至つては沙汰の限りでもあり、淺猿しい心地もする。

力の自覺、自分にどれだけの力があるといふ事は、單り高等學校の受験生にとゞま



らず誰人も有つて居なければならぬ。實際、自分の力の足りない結果としてやつてもやつても駄目な場合がある。父兄その他、激勵する人がある爲め、自分に出來ない（いろ／＼の點より）と知りつゝ、二三年も續けて受験し鳥打帽の悲哀を見せる人がある。その間に年は逝く、高等學校に入れないのは勿論のこと、二三年過したばかり、歳月は鼻の下に美しく髯を育て、呉れたきり、何の能事もなくぶらり／＼と暮して居るのである。困つた事と言はねばならぬ。

方向轉換は此の場合に最も有効な事だ。予の従兄は九州の某高校を受けること二回に及んで落ちた。それも只漫然と遊んでは居ない、中學を出て一年間早稲田の豫備校に居た、受けて落ちて又た早稲田へ來た、又た落ちた、又た——然し、従兄はこゝで方向の轉換を思つた。憤然高校を斷念して岡山醫專へ行つた、四年經つた、在學中海軍の依託生となつた彼は今では大軍醫である大尉相當官である、彼と競争して高校を得、大學醫科を出た友人の某も矢張り大軍醫である、跡の鳥が先のに追つ着いた。力

の自覺は方向の轉換と密接の關係を有たねばならぬ。單に諦めてはならない、諦めるよりも、第一の道が峻険であるなら比較的樂な第二の阪を上るのである。高校案内記にかゝる事を記すは目的と背馳する様であるが、それは、どこまでも立派に人にしてやり度い筆者の婆心に外ならぬ。執着心は宜い、力の自覺があつての執着心であつて欲しいのである。

高等學校の合格者を見るに、大多數は、其の年の中學卒業生からで、次はその前年次はその一年前、即ち、中學卒業の年を中心として三ヶ年間有効であるを見てよいのだ。末尾に大正六年度の表を附して置いたが、其の内、卒業の後より前年の方が成績がよいのは二高一部の成績のみだ、即ち二高は大正六年出身の入學者二十五名で、五年度からは三十三名、八名丈け多いのである。他は其の年のがずつと多い、どうしても三年間が覺悟の定め時である。番茶は出端にはうまいが、出がらしとなつては、色も香もない譯になる。



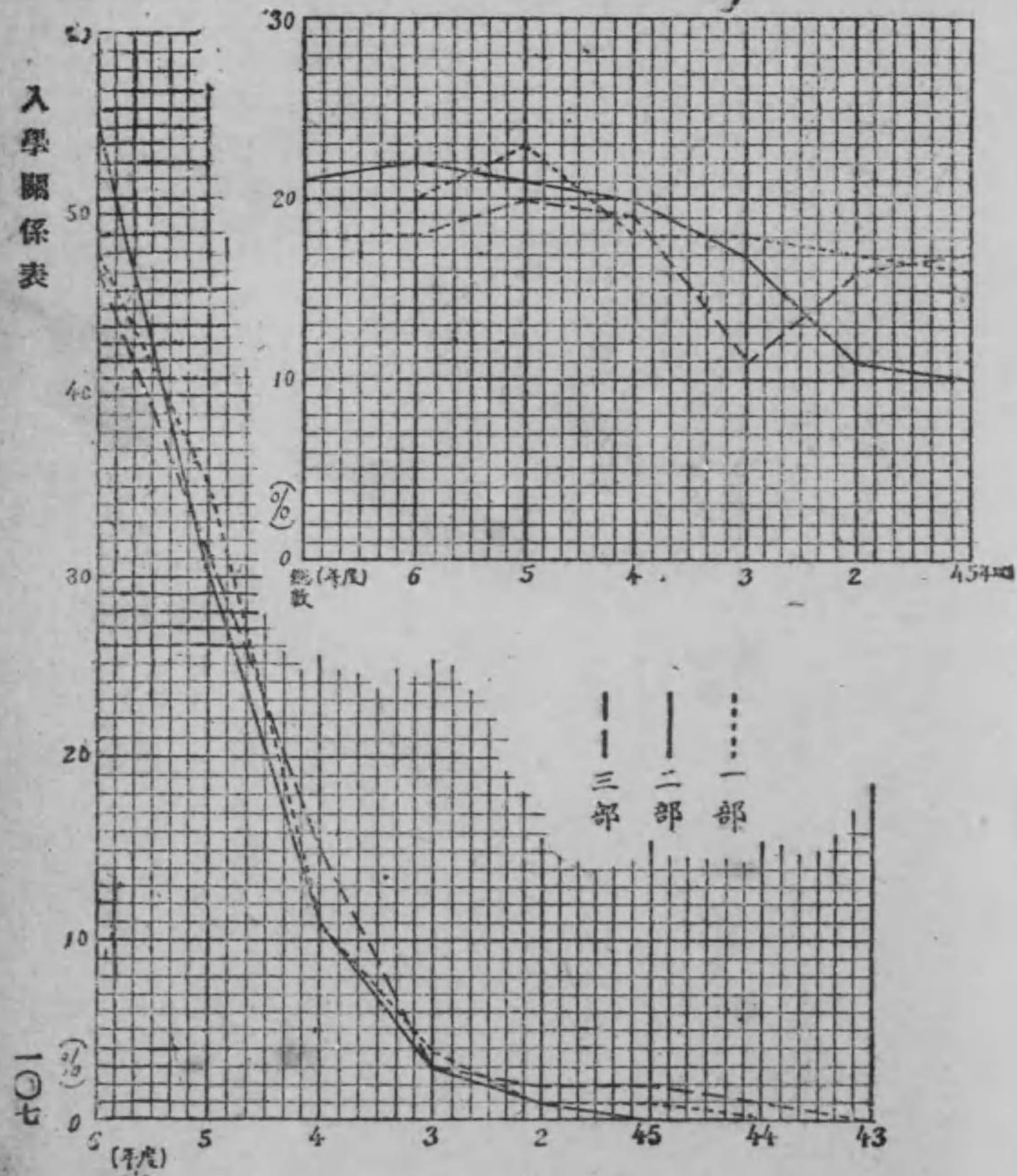








表係關學入ル依ニ別度年業卒校學中ノ者學入 二第



上圖 左端ノ行ハ各部  
入學志願者總數  
ニ對スル入學者  
總數ノ百分比ヲ  
示シ、其ノ他ノ  
行ハ入學志願者  
及入學者ヲ中學  
校卒業年度ニ依  
リテ分類シ、其  
各年度ノ入學志  
願者ノ對スル入  
學者ノ百分比ヲ  
示スモノナリ  
(但シ右端ノ行  
ハ明治四十五年  
以前ヲ一括シタ  
リ) 下圖  
入學者ヲ中學校  
卒業年度ニ依リ  
テ分類シ、其ノ各  
年度ノ員數ガ入  
學者總員數ニ對  
スル百分比ヲ示

高等學校受験秘訣

總計

志願者	五、三九三	三、三二一	三、五三三	四四五	一七	一〇二	五二	一八	一三	一八	一三	一一	一七九三
入學者	一、〇九三	七〇六	二五九	七二	二六	二〇	五	一	一	一	一	一	二、一八三

備考

- 一、右ノ志願者數ノ外ニ出願當時檢定試験受験中ノ者九名アリ
- 二、檢定合格ノ者ハ其ノ合格ノ年ノ中學卒業生ト同様ニ看做セリ
- 三、各高等學校志願者數ハ第一志望ニ依リテ之テ分類シ入學者數ハ志望順位ノ如何ニ依ラズ
- 四、一高三部ニ於テ内ノ字ヲ附シタル數字ハ内何名ハ獨逸語ヲ以テ受験外國語トシタルモノナルコトヲ示スモノナリ



### 大正十二年の高等學校

原内閣の、高等教育擴張案は、恩賜金を基礎として、全體に亘る四千四百萬圓の計畫である。大正七年十一月公けに發表して、議會は之れを可決した。帝大の擴張、既設校の擴張勿論のこと、大正十二年度に於ては高等學校二五（現在の八校に本年開校の分を併せて十二校より更に十三校を殖やす勘定である）農業專門一〇（五校増加）工業專門一八（十校増加）商業專門一二（一校減じ七校増加）藥專二（公立より轉管一新設二）外語二（一校増加）帝大法學部四（二學部増加）經濟學部二（新設）醫學部五（新設二）工學部五（新設二）文學部二（理學部三、農學部三（新設二）醫大昇格五（新設）商大昇格一（新設）即ち約五十校の増加である。中學卒業生にさりての福音と云ふべしである。

此の内、本年開講の四高校以外、高等學校は山形、青森、茨城、埼玉、静岡、大阪、兵庫、鳥根、廣島、高知、福岡、佐賀の十二地方に豫定せられて居る。いづれが早く開講されるか、未知數の問題であるが、大正八年早くも工事にかゝつたのは山形、青森、茨城、鳥根、佐賀の諸地方である。

## 改訂學校評判記

出口 競擔當

### 改訂の序

……あれから、八年になる。『問題とされる一高の解剖』を、讀賣新聞に掲げたのは、明治四十四年の二月——三月であつた。八年の間に、吾が『一高』の事物は、可なりの変化を示して居る。第一に、校長が瀬戸虎記氏に變つた。第二に、寮舎一部の改築案が數年振に通過し、舊寮として有名なる東寮は取り毀され新寮が竣成し別に和寮が出来た。第三に、第四に——生徒の思潮の如きは、世と共に並行する。昔の係は今と雖も見られぬ事はないが、運動部對文藝部の抗争の如きには昔の如く深甚なるも



のを見られなくなつた。九年前の記事は、若干訂正の要あるを見るのである。當年の在學生徒は、今日に於ては悉く學士様である。

高等學校に關する記事、評判、興味本位の記事を書き出したのは、予を以て最初とするものではない。鳩箭子（白川子）の『自治寮生活』もあれば、河岡潮風君の『東都遊學々校評判記』の中にも納められた。新聞の續き物として取り扱つたのは、予が最初の人であるけれども、その後も折に觸れて問題になる。一高が斯くまで問題になるのは一高の永い歴史と、一つは東京に在ると云ふ地理的な強味であらう。更に、年々歳々大學に進まんとする秀才が擧つて一高を受けること云ふのも、一高の名を永久に記憶せしめる所以である。私立大學として、今日錚々たる名ある二三の學校にも、第三者を以て評せしめば、『廣告時代』と云つた様なものがあつた、然し、一高にはそれがない。無くして廣告されて行くのは一高の得なところからかも知れぬ。

生徒の永い間望みを繋いだ新渡戸校長の去つたのは、大正二年の四月であつた。そ

の後に來たのは文部省視學官の首席に居た瀬戸氏であつた。瀬戸氏は二十九年理科大學物理學科の出身で、二十六年第一高等中學校の出身、教授の主なるものは先輩であり、且つ、自身教授をうけた先生である。そこへ乗り込んで來たので、之れをうまく制御し得るであらうかを世間は疑ひ、且つ興味を以て眺めて居た。だが、事は案ずるより産むが易い。結構納まる。生徒は反抗しようともせぬ温順しく勉強して居る。之れも現在の風潮が指示するところで敢て不思議とする事も要らない。勉強しなければ損だと云ふ、利己的な自我的な考へが今の生徒の胸にある事は事實である。校長などはどうでもいゝ、秀才の集まつて居ると云はれる一高を、いゝ成績で卒業して大學へ進む、それで澤山だと云つて居る者すらある。少しくお座がさめる。だが見方によれば、それも面白い。

小説に個性が這入つて面白い様に、學校も時代々々によつて若干形をかへる。新渡戸さんの時代と狩野さんの時代が違つた様に、瀬戸さんとなつて又た違つた。瀬戸



さんの個性が今日の一高には若干働きかけて居る。新渡戸さん時代には『成るべく主義』で汚ならしかつた校舎が、瀬戸さんとなつて確に隅から隅まで綺麗になつた。これは瀬戸さんが、永いこと役人をして居た爲めに馴致された習慣性の働きでもあらう。瀬戸さんを一介の事務官扱ひにするのは違つて居る。今日の瀬戸さんは漸次精神家の俤を備へて來た。瀬戸さんの過去の経験と、一高の校長としての自覺とが合體してその進歩(?)を促すのである。

『問題となれる一高の解剖』は、新聞記者の見たる興味的記事に相違なかつた。それが一冊の本と纏まつた場合に、讀者を益したか否かは筆者自らには疑問なきを得ない筆者としては、その全部の改訂を欲するけれども、さうも行き兼ねる様である。止むなく若干の加除を行ふにとゞめる。

初版と今日とは大分違つた處がある、本文で直した所もあれば、註をして訂した所もある。二高は三好さんが大宮人となつて、武藤氏が校長になつた。武藤氏とは先達

て高等學校長會議の時出會した。仙臺市の學府としての價値は今後ますます證據立てられる、四高の溝淵氏にも武藤氏の宿で逢つた、相變らず乗馬がお得意だと云ふ事である。仙臺、金澤は曾遊の地である、金澤にはいづれもう一度行つて見たいと思ふ。五高は予の郷里である。六高と云へばあの當時いろ／＼と笑談を云ひ合つた出身者のK君が母校に教授となつた事など興味多く思はず居られない。七高もますます實質を改め、新しい若い教授がごし／＼出かけた、岩下壯一君や井上越君や、上篇に豫記せし如く、七高の現在は生徒の入學狀況に於て他に比し芳ばしからぬ事情は、今度の擴張案によつて、案外、好結果を來たさぬものとは限られぬから、之等は注意して見たい。八高は別に代つて居ぬ、教授に數學者の竹内端三、植物學者の田原正人兩理學博士を有することは、けだし同校の誇りか。かゝる比をされば一高には飯盛里安、三高には山崎榮一、共に理學博士で化學者である。(山崎君は北大助教に轉任)

各高等學校を通觀するに、漸時教授中の老朽者は引退して新進者が取て代ること、



なつた。古參者は勅任教授に陞して引退するが普通である。高等學校は大學程には老朽淘汰の必要を感じないけれ共矢張り新らしい理屈の分る人々をその師に有し度い。改訂の序となす。

### 第一高等學校

#### 一、一高氣質の變遷

徳富蘆花が一高の辯論部で演説をした事が、一方ならず世間を騒がせた。新渡戸校長と畔柳辯論部長とは爲に譴責を喰つた。徳富と云ふ人は、よく一高に崇る人である。三十九年にも此の學校で『勝利の悲哀』を演じて、其の結果、二三の學生は馬鹿に感ずつて仕舞ひ遂に學事を中止し行李を收めて勿々に歸郷した事もある。餘談に亘るが此の蘆花が學習院で演説をすると云ふので、乃木院長が驚いて彼の様な『勝利の悲哀』なんかと云ふものを喋舌られては大變だと、單騎蘆花の門を叩いて『ごうか話は止して呉れ』と斷つたと云ふ話もある。

一高に於て今回の事無かりせば、一高に對する社會の聯想は依然、十年前若くは十年前の舊夢を繰り返し『剛健』『尙武』『弊衣』『破帽』と云ふ様な文字に繋がれて居たのであらう。

然らば一高の校風は何う變つたか。一高青年學生の思想と氣分とは何う云ふ風に翼を延して行くかを書いて見る。是れ實に一高の事とのみ言はず、一高を背景としたる現代青年思想の傾向をも略一般を考察し得られるのである。

彼の立派でも無い、塗りの剝げた一高校門を出入する學生の姿は同じく昔の儘の毛の摺り切れた霜降りの詰襟に黒小倉の洋袴、それに下駄を引き摺つてカラコロとやつて居るが、頭の中は餘程變つて來た。當日蘆花氏の演説中、誰一人として是れに反抗する人は無かつた。お客だからとて遠慮をする様な學生はもとく一人も居なかつた筈である、温順しいどころか、約二時間に亘つて聴衆は水を打つた如く静まりかへつ



てボカンと辯士の顔を見乍ら宛然人形を並べた様に木の腰掛に尻を下ろして居た。其時慌てたのは生徒より先生である。會散じて三々五々、薄す暗い校庭を縫ふての歸途一人の大学生は睡を上げて『一高も駄目だね、誰一人立ち上つて異論を上げる者も無いじやないか』と呟いた。此の一寸した言葉の背景は明かに一高の近況を語つて居るのである。

混亂を極めて居る一高の思想界！此れに就ては追々と記述する心算であるが、一高は確かに前の一高ではなくなつた。東西南北中梁の六寮の建物は見すばらしけれど頑として校内に聳え、名物の寮雨（窓から小便）は昔の儘乍ら、一高の所謂『色』は自然に褪せ行かんとする。試に見よ、一高の建物が戴いて居る彼の時計臺も一昨年歐洲へ留學した理學士（一）友田鎮三氏が居る時分には、氏自身で鍵を巻いて居たから些しの狂ひも見えなかつたのであるが、氏去つて以來は道を歩き乍ら時計を合せて見てもちよよく間違つて居る事がある、別に此の事が、目下の一高と何等關係があるので

無いが『學校の時計は新渡戸校長の頭の様によく狂ふ』と誰やらの私語を小耳に挾んで、チヨイと書いて置く。

註（一）友田理學士は、現に九州戸畑の明治専門學校教授である。

二、籠城主義揺らぐ

嘘と云ふものは、さう長く効験の續くものではない。假面と云ふものは、何時かは剥落の運命に接する。一高等も徹の生えた籠城主義を永く抱持する譯には行かなくなつた、何時の間にか時勢が變つて、ローマンスにでも有る様な向陵城の外には心行くまゝに自動車が行く馬車が驅る、一高を貫ける古い思潮も時の影響を蒙らずには居られなくなつた。是れを最近の校友會雜誌に徴するも、小さい事ではあるが、論説が思潮と變つた。文苑が創作となつた、而して文藝部委員の就任の辭と云ふものが對話風で書かれた。之れには噓先輩共が眼を丸くした事であらう。

所謂、一高自治寮の存在を危くした急先鋒は、先頃物故した文學士折盧魚住影雄で



ある。

彼れは、明治卅八年當時、獨法三年四の組の一學生であつたが『個人主義の見地に  
 起ちて方今の校風問題を解釋し進んで皆寄宿制度の廢止に論及す』と云ふ長い標題を  
 校友會雜誌上に公けにした。其の要旨は斯うである『一千の校友に自由を與へよ、而  
 して其方法は自由の光榮を知悉せしむる事一也、其の保證を與ふる事二也、謂ふとこ  
 ろ自由とは何ぞ、束縛を感ぜざる心情是れ也、次に所謂自由の保證とは何ぞ、皆寄宿  
 制度の廢止是れ也』青天の霹靂！此の平調を破つた自由の叫びには校内沸然として動  
 搖をはじめた。或者は彼れを呼んで邪道異端となし、甚しきに至つては『擲れ！擲れ  
 ！』と叫んだ、併し、左様易々と殿り倒されるには彼や餘りに心の強者で有り過ぎた  
 引き續いて昨年高等文官試験に二番で及第した法學士(2)鶴見祐輔の『予の校風論』  
 今は京大の大學院に居る文學士(3)福井利吉郎の『所謂個人主義の見地に立ちたる校  
 風觀を評す』など、いづれも籠城主義を排し、更に(4)和辻哲郎は『精神を失ひたる

校風』と題してソシアリティを絶叫した。そののみならず、魚住折盧は神聖なる校友會  
 雜誌に於て『珊瑚島』と題する小説を載せた。此れが校友會雜誌に小説と云ふもの、  
 載つた濫觴である。魚住を擲れの聲は一層激しくなつた、彼れや、實に自治の城を喰  
 ひ潰す白蟻と目せられたのである。

魚住の主張を憤つた連中―主として運動家は―彼れを袋叩きするの計畫を立てた  
 所が生憎魚住は通學生であつた故却々擲る機會が無い。ごうかしてと心を碎いてゐる  
 内に何時の間にか其の事を漏れ知つた魚住は我れと吾身を其の渦中に投じて『君等の  
 自由にして呉れ玉へ』と脊中をクルリと向けたので、之れには流石の豪傑連も度肝を  
 脱かれ、擲るごころの騒ぎじやない。却つて魚住黨の人々を殖すに過ぎなかつた。

魚住が膽力あり、且つ剛情張りの男であつた事は嘗て獨逸語の岩元教授(禎氏)に向  
 ひ『先生の翻譯は却て斯うした方がいゝかと、思ひますか』と、主張し、自ら手本を示す  
 と、岩本教授嚇と怒り『いけないッ』と一喝、と、兩方青筋を立て、頑張つた末、教



授『ちやア落第させてやる』魚住『何だ落第屁の如し』とうく其の年の試験には落第点を頂戴したのでも判る。

註 (2) 鶴見君は、先、鐵道院參事として同院庶務課長の重要な位置にあり、今歐米留學中、(3) 福井君は文部省囑託 (4) 和辻君は、依然文筆に親しんで居る。

三、文藝部と運動部

永井荷風氏が曾つて『新小説』に書いた『すみだ川』と云ふ小説を見ると、主人公が二十歳まで辿つて來た柔かい生活から、あの荒々しい 賄 征伐とか、ストオムとかで充ちく居る一高の空氣の中に、何うしても身を置く氣が浮ばないので、上の望みのある試験を態々落第したと云ふ事が書いてある。之れを讀んだ一高の生徒は何と言つたらう『うまい事を言つてるね』と無器用に腕組をして首を振つた。之れが昔の一高ならば、正しく粗暴とか蠻殺とかの肩書の手前、『何んだベラポーな』と『新小説』を地べたへ叩きつけたものであらう。

一高思想の變遷史とも云ふ可き一部の寮歌集を執つて、約十年前の自治寮の歌を誦して見ると、近寄つたら擲るぞ式の思ひ切つて『強い』調子の歌で充ちて居る。『我が一高は天下の粹』と云ふ歌の一節を怒鳴り乍ら握り太のステツキを振り廻して、田舎の宿場のやうな、晴れには塵多く雨には泥の深い本郷通りを歩いて居た一高生徒の姿がマザ〜と眼に浮ぶ。賄 征伐の馬力のかげ方が強すぎた結果、血混れになつて争鬨をやつた時代もあつた。『正門以外より出入す可からず』と云ふ規定に背いて、或るポールマツチの日、一外人が柵を越えんと『毛唐の奴擲つちまへ』と六七人で追つかけて鐵拳を見舞つた爲めに、危く國際問題を惹き起さうとした事もあつた。

運動部！去年四人を大學に奪はれてから、一高の野球部は愈々淋しくなつた。それ達者な井上と龍澤が都合で止めてから、益々衰へが見えて來た。キャプテンの(6)平賀は此の方面の人として、穩和に過ぎる、彌次軍も山口獨眼龍が大學に去つてからサツバリ活氣が無くなつた。シーツや風呂敷の應援旗は昔の如く振り廻されてあるが



如何にも實が入つて居ない。去年の對慶應試合の時には、法螺貝に陣太鼓を持ち出して行つた。太鼓は根津權現から一日五圓の約束で借りたもので、ドン／＼と頻りにやつては見たもの、あの通り氣の毒な負け方をした。平賀の茶目さん、今や消息如何。他の部が振はぬに比し、ズツと芽を出して来たのは即ち文藝部である。文藝部と云つても、雑誌の上丈の事であるが、昨年二月委員が變つて前回に示した如く表紙を赤くし、思潮、創作各欄を擴張して従來徒らに跋扈して居た寮報とか部報とか云ふものを精選して質實なものとして来たので、運動部の連中は酷く激昂し、昨年三月一日、紀念祭の夜の茶話會で危く文藝部委員に例の鐵拳制裁を加へやうとした。文藝部と運動部との衝突！これから追々ど話が面白くなる。

註(6)平賀君は法學士で、神戸の三菱造船所に勤務中である。

四、校長排斥の由來

一高の紀念祭は、蠻骨稜々たる一高生の催しとしては意外に優しいものである。女

人禁制の一高も此の時斗りは若き婦人の來觀を許す。先づ、此のお祭りは南蠻に咲く花とでも申す可きか、今年も其の祭日に近づいて、後數日を餘すのみである。例の慷慨先生達は一高の風俗日に、非なるを嘆き、今年こそはリボンの追風や、空氣草履のゾロ／＼は斷じて入れぬと敦圍いて居るが、果して何うなる事であらうか。紀念祭に就て思ひ出さるゝは當夜の全寮茶話會なるものである。

一年一度の此の會合は、普通のものど違つて、此の日斗りは校長も糸瓜もあつたもので無く、何等か學校内に起つた問題に就て、縦横無盡に討議する。已に一昨年同會では新渡戸校長の排斥演説をやり、昨年同會では痛快に文藝部委員の排斥を試みた。今年果してどう納まるか。

新渡戸校長は、生徒の噂によると頗る惻愴な學者には珍らしい程世才にたけた、更に言葉を換へて言へば、目から鼻へ抜ける様な才物であるさうな。更に約言して彼等は之れを『唐辛子の校長』と云つて居る。然し型に倣つた因習的の校風に馴致された



彼等はどても此の校長には満足するまいと云ふ観測は、多少事情を知つた局外者の口から出た。果せる哉。四十二年三月一日全寮茶話會の席上に於て(7)末弘嚴太郎は堂々と校長排斥論を唱へ校長の八方美人主義が、一高的でない理由を述べ口を極めて校長を痛罵した。之れを享けてすつくと起つたのが石本新六男の長男、二部に席を置く(8)石本惠吉、是れ又た双手を舉げて末弘に加擔した。此の間新渡戸校長は神色自若、時に微笑を洩らして此の排斥論を傾聴して居た。

石本の次には、現代議士吉植庄一郎の息(9)庄亮が、前二者と全く異つた見地から校長擁護説を唱へた。此れが濟むと今まで黙つて居た新渡戸校長は徐ろに口を開き一々實例を舉げて自己の所信を説き其の誤解無からん事を述べた。其の態度が頗る眞摯であつたと云ふので元來が生一本の悪く云へば芋の煮えたも御存知ない一高生は、先きの憤慨も何處へやら、校長の演説に説服せられて演説中は一杯の涙を眼に溜めて居たが演説が終るや一時にワアと泣き出した。泣いた斗りじや濟まない、今度は末弘、

石本を擲れど反動的に叫び出した。末弘石本が其の夜果して擲られたか否やは今日に至るも不明である。

兎に角、それ以來、一高多數の生徒と校長とは近來流行の言葉で云へば情意頗る投合し、云ふ可からざる魅力を持つた校長の一言一句は巧みに青年の心を捉へた。腫物は根の張らぬ内に薬で散らすよりも、出来る丈け腫らして思ひ切つて切開したがいと云ふ話である。

文藝委員排斥の顛末は、誠に次に述べるが如し、校長排斥はそれで一段落がついたが血の多い不平の多い青年のことだ、こゝでも又た一悶着が持ち上つた。例年二月に雑誌編輯を新しい委員に引き渡す事となつて居るが、昨年の委員は杉部長の下に(10)小熊虎之助(11)久保勘三郎(12)小野清一郎(13)柳澤健(14)渡邊浩と云ふ五人男であつた新しきにかぶれた彼等の編輯せる雑誌は保守的な一高生の氣に入る筈が無い。時は昨年全寮茶話會の席上、反對派は對話體で書かれた『就任の辭』からして第一癩に障



る、抑もく一高の精神にもぞるゝは無いかと云つた様な事を愚圖り出した。それから新任委員が勝手に寮報部報を壓搾した事も不都合だと云ふのである。此の時、來合はした法科大學の(15)蘆田均は「就任の辭に脚本を書いたからとて眞面目を缺くと云ふは當らぬ」と述べ、盛に委員方に同情した。

次で登壇したのが英法の(16)梅原多門、綽名を黒(足袋十五)悶と云ふ、黒悶先生の珍話は次に譲る。

註。(7)末弘君は、現に法科大學の助教として、民法研究の爲め米國に留學中、(8)石本君は、父君の後を繼いで男爵様、工學士で三井鐵山の社員である。(9)吉植君は法學士、乃父の關係上、中央新聞に關係して居る、(10)小熊君は文學士、心理學者で宮城縣二中教諭、(11)久保君はミツロ石鹼の二見屋商店に居る、(12)小野君は法科大學助教、(13)柳澤君は樺濱郵便局外國郵便課長、(14)渡邊君は三菱會社勤務工學士、目下歐州にあり、(15)蘆田君は佛國大使館三等書記官、(16)梅原君は大同生命社員。

五、所謂一高の生活

此の梅原黒悶の綽名については、種々の説がある、色が眞つ黒で足が大きい、而か

もそれが十五文と云ふ大足と來てるからと云ふ説もある。それにしても悶の字が可笑しいが、一時一高に煩悶病が流行したから、恐らく其れに起因したもので、も有らうか。ぬつと計りに立ち上つた黒悶先生「聊か文藝部の態度に就て一言したい」と冒頭を置き、「今の文藝部は校友の心とは全く離れた所がある、前委員に對しても吾輩は尠からず不平を有つて居たけれ共、上級生だから黙して居た。併し今度と云ふ今度は黙つて居られない、何が革新だ、實に吾輩は失望したのである」と場内を睨み廻して懷中から雑誌を取り出し、先づ第一頁をサツと引き裂いて足で踏み蹂り、尙ほ一枚二枚と引き裂いて寮報部報と之れ丈けを取り残し「之れ丈けで宜しい、之れこそ吾が一高の生命である」と叫んだ。

續いて中和説が出る、反對論が出る、最後の眞打として登壇したのは吉植庄亮であつた。彼は當時一高短歌會の牛耳を執つて居たのみならず、擊劍がうまい義太夫がうまい、吉植登壇して一同は鳴りを鎮めた。吉植彼れは徐ろにユーゴーとシエンキウキ



ツチを引證して、人生の暗黒を描くのと光明を描くのと歸する處は眞を描くにあるとて文藝部諸君の暗い作風を辯護した。之れが又た反對派に大受けて吉植は遂に撲られずに済んだ。文藝部對運動部の活劇は一と先づ之で一段落を告げた譯であるが、面白い事には、近頃では例の黒悶先生もはじめて小説と云ふものに觸れて「僕は田山花袋の『縁』を読んだが文藝部の委員が彼の方面に進むのを望むよ」等と云つて居る相だ。文藝部の勝利！ 而して新渡戸校長自らも「君等はドン／＼思ふ事を書け責任は吾輩が引き請ける」と言明して居る。

變つた／＼と云ふ一高生が、今猶、全然行つて不可ない所が二ヶ所ある。大學前の西洋料理店バラダイスと汁粉屋の伊勢屋、共に理由とする處は女が居るからである。女の秋波は一高生に大禁物ださうで、梅月の近くにある女理髮店の如きも大々的に排斥せられて居る。床屋は校内にお一人様五錢也、の見すばらしいのが一軒、髪刈り方に長短はあるも其の邊は一向に平氣で制帽を冠れば胡麻化しが利く。其の他校内に

ある店屋は菓子店、蕎麥屋、文房具店、下駄屋についで此の頃までは毎夜おでん屋がはり込んで居たが、之れは些と體裁が悪いからと云ふので僅か一ヶ月でお拂ひ箱となつた。試みに嚶鳴堂に行つて見ると胡座をかいた連中が「おいカケ二つ」と來る、大抵はカケで事を済ますのだが、時偶レコードを破つて種物を食ふのもある、先生の内でも蕎麥は必らずカケ又はモリに限ると定めて居る人さへある。

下駄屋で一番賣れるのは、一足十三錢の日和下駄で、七十錢の下駄を買つた生徒が今日までにタツタ一人、土曜から日曜へかけて十三錢の下駄が天下を横行する。一高生が食物の繩張りには梅月はもう古く、少しハイカラだと本郷カフェーか青木堂、以前は門前に在る蕎麥屋の松屋に行く事をモンゼルと云つたものだが、當節は何事もブツシングの一點張り、其の一度ブツシングするや末廣の汁粉一杯二錢五厘の奴を五杯も續け様に召し喰る。

一高を目的に店を開いたのが、森川町追分町蓬萊町邊に多い。然し一高に因んだ



名をつけた店は少い。森川町に一軒一高堂と名乗りを上げた文房具店と、大學前の常設おでん屋一高屋位であらうか。色硝子の障子に「おでん茶めし」と書いた中に這入つて「此の豆腐はいくらか此方のは何だ、がんもどきか、それを貰はう」肥後の學生なら「芋ん煮えとつとば呉れ」と皿を突き出す。

六、委員千慮の一失

校友會雜誌は、明治四十三年十二月を以て二百號に達し、紀念號を發行する事になつた。其の紀念として十一月二十三日、校内の嚶鳴堂に紀念講演會を開いた。其の爲めには京都から桑木嚴翼、上田敏の二博士が上京し、他に三宅雪嶺、田中正平の二博士、小山内薫、生田長江の二學士が講演をする事となり、當日の聴衆は公衆をも加へて千に近かつた。

委員連が、眼を皿の様にして場内を見廻はして居ると、群衆の中に澤々しい黒髪を庇に結つて大きな白いリボンを挿した女學生が二人、キチンと畏まつて座つて居ることを發見した。さア大變だ。嚴な女人禁制の靈場の空氣に香油と白粉の匂ひが漂つて居る！ 大家の名論卓説を拜聴したいと云ふので來たのだ、その優しい希望を蹂躪して阿漕に引き出す事も出来ない。委員達は額を鳩めて凝議して居たが、遂に堪らなくなつてそつと傍へ行き、理由を話して退場して貰つた。

それ迄ならば頗る無難である、一高の生徒は其の腰掛けて居たベンチの跡へ、潔めの鹽を振り撒かずには居られなかつた。どうして女が這入つて來たのだらう？ これも問題になつた。探知する處によると、何でも會が始まらうと云ふ矢先に、ちりんちりんと電話の鈴が鳴つて來た。其處へ居合せた文藝部長の杉ピン介氏——本名は敏介トシスケと訓むのだが、夏目漱石氏の「吾輩は猫である」に一寸此の人の事を書いて、それにピン介とあるので爾來誰一人敏介と呼ぶ者が無い——がはアはアと受話器を耳に當てる。「今日の講演會に參られますか」との事「え、お出でなさい——直ぐ始まりますから」とちりんちりと切つて仕舞つた。



この電話こそこの事件の女學生らしく「貴下はどなたですか」とビン介氏の訊なかつたのが實に千慮の一失であつたらしい、二人とも女子大學の生徒らしかつた、出て行く時に委員連の顔をジロリと尻目にかけて行つたさうな。

女子が校門を出入りする事は、豫て問題となつて居た。此の事件の起つて以來、早速臨時議會が召集され、各寮の各室から一名の總代を選び其の總代會で「來る紀念祭には斷然女を入れざるの件」に就て討議した。賛成者は尠くなかつたが、これは流石に蠻的に過ぎるとて撤回し「切符を發行して入場を制限するの件」と改案され、其の結果、學生一人に就て十七枚の切符を渡す事に決議された。無制限時代には一日八萬から九萬の入場者があつたものだ、新しい制度に對しては不平を云ふ者も多い、端艇部では當日寮歌集と繪ハガキを賣つて其の收入を端艇の方へ廻すので、この様に制限されては従つて賣れ行が惡からうと心配して居る。

それ、一難去つて一難來るものか。

七、暴風の記録破り

一高の三名物と云へば、言はずと知れたストオム、寮雨、萬年床の三である。ストオムは餘程風いで來たが、之れにも可なり種類があつて、一等級質の悪いのが停滯ストオム（又の名レクチュア、ストオム）だ、其方法は最初温順しく起しに來てベチャクチャ喋り乍らいつまでも「立ち去らない、腹を立てると嬉しいと云ひ、體よく斷ればこの空氣はいゝとか何とか理屈をつけて御神輿を据える。四十二年度の英法科出身で今は大學を出た淺村功など、此の道に掛けての達人で擊劍の大將ばかりでは無かつた。佛法科の水野秀は他室の硝子を滅茶々に打ち毀したのみならず、人をも擲つたので禁足十日を喰つた。此れがストオム近來のレコード破りである。

次に萬年床とは、寢床を敷いたまゝ一週間も二週間もほうつて置くのであつて、其の臭さつたら無い。然し先生達豪傑揃ひの事であるから敢て意に介せず、毎朝八時頃まで其の臭い布團を冠つて居て、始鐘の音に慌て、眼を擦りく教場へ行く。之れに



就て寮務係は可及的小言を言はぬ事にして居る。然して新渡戸前校長も又た「成るべく下駄を穿いて教室に入らぬ事」成るべく制服制帽たるべき事」と萬事此の成るべく主義でやるものだから、ストオム衰ふると雖も、萬年床丈は益々益であつた。

然し、前年小松原文相が巡視すると云ふので、其の時丈は流石に叮嚀に疊ませられてあつた。棚の上には薬瓶がある、薬瓶の中には黄色の液体が入つて居る。薬か？野暮な！寮生の腹を暖める爲めに沈黙を守つて居る酒と云ふものである。

自修室が階下で、二階が寢室、若し其れ深夜聲なき時各寮の窓下に立てば頭上シヤアシヤアとして聲あり、是れ一高名物の寮雨にして、熱く而して臭き雨なり。冬の夜なれば點滴簷に氷柱を作す。小山内薫君の作つた寮歌「緑もぞ濃き」の四節「彼の荆棘を刈らんとて、抜き放ちけり秋の水」の秋の水は、此の寮雨を美化したものださうな。今は堂々たる紳士である樋口龍峽君も、この學生時代には御多分に洩れず盛に寮雨を飛ばしたもので、校友會雜誌二百號紀念會席上に於て、寮務係大沼浮造氏の禿顛

にしたゝか浴せかけ遂に今日まで謝罪の機會を失して居ましたと懺悔した。斯くの如くにして「一高校内皆便所」とは振つて居るでは無いか。

文學士武島羽衣が「英文科一年として在學中、戯れに『第一高等中學八景』を作つた事がある。第一、倫理講堂の秋月、第二、時計臺の晚鐘、第三、寄宿舎の夜雨、とこゝでも寮雨が名物に入る。第四、圖書館の暮雪、此の邊少しくコジツケの氣味あり第五、生徒の落雁、第六、寢室の歸帆に曰く「八重の潮路の浪枕、片しく衣帆にかけて、夢を載せ行く沖の舟、寢ざめの床に歸るらむ」。之は實は萬年床だ。夜着を布いたまゝソウツと脱け出した形は成る程一寸帆にも見えやう。第七、赤煉瓦の夕照、第八運動場の晴嵐と云ふ順序である。

八、藤村操と一高生

一高には、門衛が七名居る。いづれも多きは十八年、尠きも五六年勤續の者で、學



生の言葉を藉りて云へば、古色蒼然たらざる人は無し。其れで相應に茶氣があつて、物理とか幾何とか數學とかの教場に入出し、「誰さんの講義はよく判る」等と氣の利いた事を云ふ。茶氣なくて何の己れが櫻かな……だ。

本郷の曙 町に寸隙會と云ふ舊派の俳句會があるが、二三の門衛はひま／＼に至極月並の句を唸つて投稿し、甚だ得意である。十八年此の方門衛生活を送つて居る菊間義住翁(六七)の今昔談を書くこと——先づ斯うだ。

十八年も此處へ斯うして座つて居れば、昨日の學生が今日は立派な博士、教授となり「オイ相變らず達者かい」と聲をかけて下さる、彼の方々も皆一度は「一寸行つて來る」と名札を裏がへしにして出かけたものだ。二十七八年頃までは全然學生は制服制帽の規定であつたが、今は和服が多い。もとはカラーなどつけてた人は殆ど無かつたが近頃は何うです、生徒さんの七八分は長マントルでお出掛けになります。之がハイカラになつた證據では有りますまいか。一體は温順しくなつてストオムなんて云ふも

のも、前程激しくはなくなつたが、それでもお酒だけは止められぬと見え、土曜の夜など微醉機嫌で寮歌を怒鳴り乍ら歸つて來る人もある、まあ、もう少し活潑な方がよう御座りますと眼鏡の曇りを拭く。

藤村操と云ふ青年が、往年日光華嚴の瀧に投じて自殺を遂げた事は、鳥渡世間を騒がせた。東寮の十八番は即ち藤村の居た室であるが、流石に其の室へ這入つて居る人は一人も無くて、ゴタ／＼品物の置き場になつて居る。今でも夜半にキイ／＼と物の啼く様な聲音が聞えるとか、朦朧とした人影が出るとか云つて、東寮の豪傑連中もいくらか怖氣ついて此處の戸を開ける事をあまり好んで居ない。恁麼幽靈談をすれば、駄々つ廣い校内到處に材料が轉がつて居るが、馬鹿々々しいから止す。兎に角一高當年の健兒も幽靈位を恐れる様では話にならない。

藤村の亞流を汲んだ人々には、四十二年の文藝部委員、金谷爲一郎や、野老某などの事を擧げ得る。金谷は何か深く感ずる處あり斷乎として學業を中止し、其の冥想的



な性格の指示するまゝ、に中途退學を決定して今では神學校に學んで居る。其の間には表面の事實以外面白い事情も伏在して居るであらうとの事。一方、野老某は四十年中これ又た憂鬱症に陥り、同年の春、保證人の宅の庭の然も咲き亂れた櫻花の下で備前長船の名刀を以て物の見事に割腹を遂げた。前後の事情は秘鍵、容易に之れを開く能はず、併し若き者の危険なる思想の轉期を巧みに脱出し得る事が出来なかつたものでは有るまい？。

救世軍の一宮少校も一高の生徒であつた。其の郷里は神戸の豪商で、神を信ずると同時に地位も名譽も弊履の如く棄て、救世軍に赴いたものであるさうな。

九、名物なる紀念祭

三月一日！ 今日は一高の書き入れ日だ。午前九時頃から紀念祭の飾り物を見やうと来るは、来るは『安宅の關』と門柱を其の儘の受附口は黄色の布を腕に纏つた委員が應援に忙殺され、校内は一杯の人だ。人を區別すると男子と婦人が五分五分位、葡

萄色の被布や紫矢絣のお召を着て赤や白のリボンを翻した若い婦人が喃々喋々として蓮歩を運んで居る。脂粉の香は此の日に限つて、一高校内に横溢した。

名物の飾り物を見物するとしやう。北寮の『隅田の夜』は吾妻橋界限の景で、サツポロビールからゼムの廣告電燈まで悉皆寫實の凝り様『三年不鳴不蜚』で大石一つ据えたのは人を喰つたもの。南寮六番には『南六式飛行機』と云ふのがある、紙製の飛行機が宙に吊られて活動して居る。参考書を積み上げて三角塔とスピンクスの出来たのは妙だ。『一高二四時間』と云ふのは起床から寮雨の光景まで、寮雨は紙建ての寮の窓から土瓶の口を出して巧に誤魔化してある。『一高の雑壇』と云ふのは各教授の似顔を卵の殻に描いて茶碗の絲底につけたのだが、之れは實に素晴らしい出来で似居る事『上手いのねえ』と或る女學生が感慨無量で之れを見入つて居た。

文藝は一高に於て一般に未だ不評判らしく見える。に、には雑誌類を並べて大罵倒を加へてある。三田文學の下に『紅茶の後にも時々こんな召し上れ』と書いて焼芋



ど落花生の殻を置き、心の花の下には百人一首をあちらこちらに織ぎはぎした名歌を添へ、文藝倶楽部の下には萬龍や榮龍の繪葉書を並べ、マイナスの記號をしてゼロとしてある。朶寮四番の『定規のローマンス』は三角定規その他の蝶々の形が出来て居る。チヨイと思ひ付き、押すなくと云つて居る内に、いつしか身は東寮に押し込まれた。東寮では七番の『聞いて極樂』は凡て一高の廣告である。一高のブライトサイドを發揮したもので、この飾り物にしろ一高を悪いところとして其の意味を含めたのはタツタ一つ見つからなかつたが、之等は最も露骨に一高を廣告して居るのである事を認めめた。乃ち『聞いて極樂』に新渡戸校長谷山生徒監等を珠數を爪繰つた似顔を書き、『見て地獄』で閻魔大王試験の槍を持つて嚴然たり、『住んで一高よい處』こゝに舟が一艘浮んで居る、曰くフレンド、シツブ。

窓の外でドーンと聲があつたから、押されに押されて熱つた顔突き出すと、東寮前の廣場で戸山學校の軍樂隊が盛に奏樂して居るのだ。おでん屋の一高屋も朶寮の下で待つて居たがあまり賣れぬ、白晝で體裁は悪いし、お客様のタネが一高の生徒とは違つて上等だからである。土儀では四日目の取組、大關の澁澤正雄君が力足を踏むところ。嚶鳴堂では汁粉の客が満員。北寮の横手では丸一の大神樂が頻りに滑稽な所作を演じて居る。西寮から押し出した假裝行列の順序は舌切雀を筆頭に浦島太郎、猿蟹合戦、桃太郎、カチカチ山と思ひくゝに一高式の痛快な意匠を凝らして觀客の腹を抱へさせた。

斯くて紀念祭の一日は、喧々囂々の内に暮れて行く。更に、夜に入つて凡ての裝飾は燈りが點くと同時に撤去され、改めて嚶鳴堂に第二十一回全寮茶話會が開催された。會の様子は省略する、明るい電燈の下に幾百どなく頭が並んで、ムツとする程暖かい大學生が『思ひ出の種だよ』と芝原に小便を濟まして室内に入つて行く。

一〇、俗語とその物語



一高には、他校の企て及ばざる一高的寮歌があり、又た寮歌に對して一高的俗謡なるものがある。何故に俗謡にまで一高的と云ふ冠詞を附するかと云へば、普通の淫卑な俗謡は神聖なる一高の容るゝ處でなく、特に雄々しい男性的の譜のみ許されて居るだから、一高の俗謡と普通とはカッキリ區別をつけねばならぬ。歴史的に黙許されて居るのは、例の『デカンシヨ』と『佐渡節』である。デカンシヨの語源を今更諄々しく云ふのも古めかしい話であるが、理屈好きの法科の人達は『デカルトのデモカントのカンにシヨッペンハウワーのシヨを採つてデカンシヨとしたものだらう』とは巧く附會けたものだ。此の處佐々木照山、木村鷹太郎氏跣足である。口は思想の代表者である。歌は思想の表白者である、次の俗謡を通じて一高の空氣を知るべきである。

デカンシヨ〜で半年や暮す、あさの半年や寝て寝す。  
丹波笹山山家の猿が、花のお江戸で芝居する。

空に聳ゆる宮城の森で、思ひ起せよ故郷を。

どうせ死ぬなら櫻の下よ、死ねば屍に花が散る。

野老某は四十年四月、櫻の下で割腹した。彼れは此の歌の眞實なる實行者であつた。

優柔不斷は男子の耻よ、腰の朱鞘は伊達じや無い。

美しい歌である。

少しく下卑て來るが、一高生の無邪氣な點を表現して居るものを擧げる、ストオム連中は喜んで這麼のを怒鳴つて歩いて居る。

アカンシヨ〜が赤門の前で、おでん燗酒稻荷すし。

酒は飲め〜茶釜で沸かせ、御酒嗜らぬ神は無い。

兎角世の中理屈で行かぬ、酒をのむ奴禁酒する。

理屈云ふなら眞面目で吐かせ、あまで拳固の雨が降る。



先づ傑作と見るべきは、

新渡戸校長と谷山舎監、いづれ劣らぬ美少年。

雨の降る日は天氣が悪い、親父や俺より年が上。

佐渡節と云ふは佐渡の盆唄で、工科大學探礦冶金科生が旅行先から輸入したもので文句も調子もデカンショより優美である。

佐渡と出雲岬や棹さしや届く、橋を架けたや船橋を。

仇し仇浪寄せては返す、寄せて返して又た寄せる。

佐渡と出雲岬や棹さしや届く、何故に届かぬ我が思ひ。

早く行き度いあの山越えて、行けば見もする逢ひもする。

佐渡へくさ草木も靡く、靡く答だよ寶庫。

來いさ云ふたさて行かりよか佐渡へ、佐渡は四十九里浪の上。

俗語は先づ是れ位として、察歌の方では今尚ほ勢力のあるのは『緑もぞ濃き』や『春

爛熳』や『あゝ玉杯に』などである。今、醫科大學に居る御手洗文雄の作『春はく〜櫻咲く向島、オール持つ手に花が散る』は一時向島を中心として暫らくあの界隈の花柳界にも流行した。(御手洗君は醫學士となり三井病院にて殉職した)

一一、教授諸氏評判記

谷山生徒監や新渡戸校長を美少年呼はりする程の一高生だもの！ 其の他の先生にも無論悉く綽名を奉つてある。

二部崇拜の中心たる須藤教授(傳次郎)の如きはデンチャンと稱して、誰一人須藤先生と呼ぶものがない。菅教授(虎雄)は夏目さんの『虞美人草』の宗近さんだとか、『二百十日』の二人連れの一人だとかの評がある。丸山教授(通一)は獨逸語の先生で擬國會の海相をつとめる無類の駄辯家であるが、先生の議論は時として枝葉に亘り過ぎる、その紛糾した論鋒を該博な智識で説明しはじめると、説明そのものが又ぞろ迷路に陥り、落語の『たいこ腹』の若旦那が幫間の腹に何本も針を打ち込んで抜けないので蒼く



なつて逃げたと云ふ話に似た事が屢々ある。

校中第一の若い先生は石川教授(剛)であらう、當年二十八位で、巴里大學のリサンシエー、エス、レットルの學位をもつて居る。老人側では内藤教授(源吉)だ。今井教授へ對しては、甚だ失禮であるが或る生徒はクロの異名を奉つた。先生は色が黒く齒に衣着せず申し上げると小汚ない先生である。先生は鼻汁をかんだハンカチで顔を拭きになるから時々其の前額に妙なものがヌタクつて居る事がある、「今井先生と差し向ひでは飯が咽喉へ入らない」と或る生徒の申し條は、そりやあんまりと申すもの先生もさぞいまい(今井)ましく思召して居る事であらう。

校内唯一のハイカラは岡田教授(實應)を以て随一とすべく、同時に出勤時間の最も遅きも又此の先生である。岩元教授(禎)は大變煙草がお好きである。紀念祭の朶寮の飾り物の前に新渡戸校長以下三先生のお供物があつて、新渡戸校長のは實業の日本岩元先生のはリ、一箱であつた。「岩元先生の一番愉快な時間は職員室から教室へ來

る時間であらう」と誰か評した如く、先生は眞に束の間も煙草を放さず、教室のどころへ來ても入口で待て暫しと餘つた奴をバク／＼吹かし、心行く斗りに煙を吹き出して吸ひ殻を窓の下に投げ「残る煙が癪の種」と云つた様な風で教室に入つて來る。

岩元先生の年俸は、大抵本屋と青木堂とに費やされて仕舞ふ、雨が降つても風が吹いても、先生の姿を一遍なり共青木堂の一隅に見出さぬ日とは無い。酒と煙草を澤山召し喫る代りに一學期に一回しか床屋に行かれぬので、頭髮は常に蓬のやうに茂つて居る。「三四郎」の弘田先生は岩元先生をモデルにしたのではないかとの評判だ。菊地教授(壽人)は獨身主義と濃厚なものと旅行好きとで有名である。先生の獨身一場の哀れな物語がある様に聞いて居る。先生は未だに無妻で下宿住居であるが一度其處へ入つたなり一度だつて轉居をした事がない。或る時珍らしく先生が轉居したと聞き、一生直ちに訪問すると何ぞ計らん下宿屋自身が轉居して先生もそれにお伴をして轉居先へ移つて行つたのであつた。(現在は然らざる由)



寮務係の大沼浮造氏の頭に、樋口龍峽氏が放尿した事は既に寮雨物語にも書いたが此の人の禿頭は名高いもので三十六年の東寮々歌「緑もぞ濃き」の最後の「宵を灯ともす記念祭」とやるべき所を一高生は「宵を灯ともす禿げ頭」とやる、又三十四年の西寮々歌の「若し夫れ自治のあらずむば、此の國民を如何せむ」と云ふ處を「若し夫れヂヂイのあらずむば、此の禿げ頭を如何せむ」とやる。兎も角、大沼先生の頭がどれ丈け眼につくかは鳩箭子の自治寮生活に記せる如く、新入生の第一印象ぢやさうだ。

此の間、一高生の甲府へ行つた折、流車中で合唱した歌が面白い「お月様えらいな」のつくり換で「大沼さんはえらいな、お日様の兄弟で……世界中をてえらあす」大沼さんをお日様の兄弟に擔ぎ上げた此の巫山戯加減はごうだ。こゝらが無邪氣の頂點でニツクネエムを頂戴したつて豈夫怒りもなるまい。

一、二、賄征伐の今と昔

近來は賄征伐も昔の様にあまり激甚でない。偶に罰卵（時には罰パンもある）で窘める位のもの、尤も一週間斗り前に何處の寮かで飯櫃の運び方が氣に入らないと云つて、ポーンと食卓を押し倒しその上の皿小鉢を落し毀して賄方を青くならしめた事があつたが、是などは近來絶無にして稀有の事である。目下の賄方は元真宗大學の請負賄をして居た湯島の阪江五郎と、松原久之吉の兩人である。一日一人前が二十錢、記者が行つた時は中食の時、副食物は昆布卷四ツと浸し物丈けであつた。但し、飯丈けは飯櫃のお代りを幾つしても構はない「おい、めえし」お茶ア「牛乳屋一本呉れ」こんな呼び聲が食堂に満ち溢れる。

賄方は元小川盛文がやつて居たが、碌なものを食はせないのもので物議が持ち上り、昨年十月十九日、各室總代を選んで賄方處分問題臨時委員會を開き、新候補者に就て討議相談した。候補者の阪江が試験的に齎した料理は委員の舌に味は、れて嚴密なる検査を受けた。一高の賄は美味も勿論の事だが、嵩が尠くては資格が缺けた事に



なる。此の時、阪江の齎した料理を記録の中から抜いて見ると、

- ▲刺身、十六切▲茶碗蒸し▲口取り、キントン、蒲鉾二切(厚さ四分)▲煮魚、青味
- ▲照焼魚肉(長さ五寸厚さ五分)▲煮込み午芳、高野豆腐、人參▲カツレツ、キャベツ、豚肉(長さ五寸巾二寸五分)▲ピフテキ八切、芋▲米

阪江の提供した品は、幸ひに委員の御意に叶つて直ぐ様採用される事になつた。條件の中には一日休食をすれば、それ丈け勘定から差引く事なども書いてある。十月二十三日『小川盛文の 賄 契約を解き新に阪江阪五郎に契約する建議案』を正式に委員から提出可決した。當時、小林委員は『真宗大學で十八錢で充分美食が得られるから一高のも同値に値下げしたがよい』と主張した處が、奥野委員は代つて之に反對をした。その理由に曰く『一高の學生はお上品ぶらぬから盛り切りの飯では足りない、無限の食欲ある人に對して同様に十八錢にしることは賄方が可哀相だ』と、こゝで二十錢説が採用され、先づ、阪江は市が榮えて居る。然し、委員の口でいつでも追ひ

出されるから委員へ對しては絶對的に服従して居る。

左に二月々末の献立表を掲ぐ。

朝		晝		晩	
▲廿三日	大根味噌汁、油揚、佃煮	牛肉玉葱大根ハヤシ煮	魚肉照焼おろし青味		
▲廿四日	刺身、葱、卵の花汁時鳥	牛肉シチユ	口取		
▲廿五日	青味、油揚、味噌汁、金山寺	焼き豚、吾妻漬	豚肉、竹輪、白たき青味玉子茶碗盛		
▲廿六日	葱豆腐、味噌汁、煮豆	ライスカレイ	煮着、輪切大根		
▲廿七日	切干油揚味噌汁、味噌汁	豚肉カツレツ	牛肉コロツケ		
▲廿八日	和布豆腐味噌汁甘露梅	ポイルドビーフ	魚肉味噌煮		
▲一日	里芋大根味噌汁福神漬	記念祭に付き 休み			

註、物價の昂騰は大分此の邊の調子を狂した、賄方は平井に代り、賄料は廿錢から廿三、廿五の順で今日廿錢、五割増の状態である。

### 一三、寮舎生活の苦樂

『春になつてボカ／＼暖かくなるとまあいゝが、冬になつて見給へ、新聞紙や反古紙で穴を防いだ硝子窓に吹き付ける風と來たら寒いからねえ——金は餘計に出しても日



の當る方へ廻して貰い度かつたよ。北側の部屋はやり切れないせ寒くつて暗くつて』東寮と西寮は各二十室に分れて、真ん中を廊下が割つて居る。北向きの窓下に座るべき籤を曳いた生徒こそ、みじめなものだ。今は大學に居る或る人が語つた。中寮南寮北寮は各十室、衆寮は六室、成らう事なら他の寮の方がいと誰やらが本音を吐いたと言ふ。窓を明けると月は凍るやうだ。寮雨を飛ばすべく窓を開けるさへつらいのである。『舊寮物語』一篇生れる、故ありと云ふべし。

一年の辛抱ではあるが、東西寮の生活は實にイヤなものであるさうだ。

朝は一體に六時半からもう食堂があく譯であるが、先づ時間通りに集まる人は少い。毎朝キッチンと集まる人は——連中で色分けをすると一年生のホヤ／＼と云ふ儂か、膳は急げの食ひしんぼうに限る。二年三年となると、前夜ストオムの疲れか何かで蒲團を頭から引つ冠つて端からニュツと毛脛を出す、蝦の様曲つて美しくない襯衣の脊を見せる裾の方へ行季の重石をしたりして、グツスリ寝込むでしまふ。感心に眼覺し

時計を置いた人もあるが、これは有名無實で、かけた時間にチチチチと鳴り出すと夢中で布団を冠せて音を殺して居る。遂々始業の時間まで寝込んで、鐘が鳴るとハネ起きて窓をあけて『大使！コヅカアイ』小使は大急ぎでパンを持つて来る、其のパンを袂の中に忍ばせ、眼を擦り／＼教室へ入る、パンは斯くて授業後に袂から出して窺と喰べる——先づ斯う云ふ連中は二年生に最も多く見る處である。

一高生は亂暴な中にも禮儀の正しい處があると、或る一高好きの人が説明した。ストオム連中では清國留學生の室とか、ポートシイズンとかポールシイズンの場合における各選手の室には敬意を表して避けて居る。ストオムなるものは、平素からイケ好かないと思ふ人々の腹癒せがはじまりで後に種々複雑したストオムが出来たものだ。却説、各室内を順に見渡すと、机と机と向ひ合せて長方形の卓をつくり、真ん中に書架を置いて割り上から十燭の電燈が吊してある。別に來客の卓とて一ツの机が設けられ、新聞雑誌が此の上のせられる。之れは無制限であるから日曜畫報、サンデー



類の雑誌も頁を引つくりかへした儘に投つてある。壁には式の如く樂書があり、哲學めいた事だの何だの、廊下に面した窓には薄汚ないカーテンが、新聞紙を貼つて中へ見えぬ様にしたのもある。入口に掲示して曰く『開けるなオイと言へ』

東寮と西寮との間に洗面所がある。そこをぬけて鍵の手に曲ると食堂に入る。口を拭き、食堂を出て来る連中は西寮の二階の窓を見上げて、草原に小便をする。午後

の時間も終り、マントを引つかけて『有樂座へ呂昇を聞きに行かうか』今夜は何だ、太十か『僕あ若竹に行く、柳連がかつて居るから——』どうだい相伴ないか』と云つた様な會話が土曜日の夕方あたりに盛に交換される。

時としては、白線の帽子を冠るべく、尠しく憚りのある筋へ行かうと云ふには、其處は御方便なもの、袂に忍ばせた烏打帽とすりかへて本郷通りを風を切つて行く。

一四、校風變遷の徑路

一高へ入つて、最もイヤなのは最初の半ケ年位で、だんく馴れて来ると一高はいゝ處ださうだ。噛みしめると味が出ると云ふ處から『鳥渡、鯉節見たいですね』と評した人もある。

先づ年期奉公的の最初の辛さを書いて見ると、新橋か上野へ着いて丁度九月の十日前後、秋の木の葉が色づいて寢室の室から上野の森が寒く眼にうつる時、知つた人もない室へ打ち込まれるのはなかく悲しい。當分は勝手は分らず、國許から来る手紙を楽しみに日を送る、水瓶に落す下婢の涙もこんな時に零れるのだらう。或る九州出の學生が友人へ送つた手紙の一節に『僕は林の中で一人腕組をして居るのは平氣だが、物を言ふ筈の人間の中に立ち交つて話が出来ぬ事程淋しい事はないね』と述懐した事は、思想ある青年の心持をよく現はして居る。

一高の籠城主義がグラつき出したのは、今更のことではない。此の根源は大要左の四つの理由から来たのであらうと或る大學生が説を樹てた。(一)以前は各地で高等學校入學試験を受け、其の際希望の學校を願書に認めると成績次第で九州からでも中國



からでも一高へ来る事が出来た。故を以て割合に健全分子を集め得たが、近來はその土地々々の學校へ入れらるゝ事となつたので自然調子が代つた事。(二)従つて東京の中學を出たものが多く入學し、自然周囲の關係上中學時代に種々の悪い事を覚え込んで居る處から、寮舎生活が窮屈でたまらないだらうとの事。(三)一般の人が温順しくなつたのに、一高獨特の彌次なるものが他人の勉強の妨げ迄して喜ぶ所から、つく／＼學校に愛想をつかしたらうとの事。(四)先入主となつた考は容易に取れぬ、一高は氣難かしい處だとのみ思ひ込み別に暖かい處を求め氣持になるだらうとの事。以上。

右の説は、聊か薄弱に聞えるけれど、當つて居る處も尠くはない。別に誰が壓迫すると云ふでもなく、時の流れが斯うして了ふのだ。新しく入學する生徒は昔の學生とは違ふ。自然一高の型に嵌らぬのも是非がない。丸いものを四角にするのは一寸困難である。茲數年の内に一高は全然變つたものになるかもしれない、或は又た、校内の思

潮が二分され相闘ひつゝ、行くのかも知れない。狩野前校長は學生に對して萬事打つ捨り主義であつたが、新渡戸さんに成てからは様子が少からず變つて來た。

新渡戸さんは『人を見たら泥棒と思へ』と云ふ諺が最も嫌ひださうな。話の調子が好くて親切で世話好きで、嘗て遠州濱松で理髮店に行き、主人の手がふさがつて居るので自分で剃刀を使つて歸つた程の人である。本郷通りの道巾も市區改正での通りだ。校長の人物で直ちに生徒をどう、と云ふのは少々無理かもしれない。

一五、今村前教授の話

今村有隣氏は、一高が未だ大學豫備門と云つた頃、明治十八年に外國語學校から轉任して來て三十九年迄、二十二年の間同校教授の職にあつた學者である。かう云ふ人から現在學生の批評を聞く事は最も凱切な事であらう。以下氏の談話。

私が外國語學校から大學豫備門へ轉任したのが明治十八年で、當時の校長は野村彦四郎氏であつた。十九年に高等中學校と名稱を改め、其の五月に帽子の徽章が定ま



つた。これは御承知のミネルバ神とマルス神の象徴とも云ふべき、柏葉と橄欖の葉を組み合せたものである。佛蘭西あたりでは勉強の意味の蜜蜂を徽章にした學校もあるが、吾が邦でも蜜蜂を用ゐた事があると小中村清矩翁が話して居られた。

然し、西洋の眞似をしたとて仕方がないからとの説が出て武と文との意味を併せたこんなものはどうだとの圖案が出て宜からうくと定めてしまつた。筋は豫備門時代から二筋の白筋を用ゐて居ました。教授服や式帽は二十二年の二月中決定したが、之れは千頭清臣氏がハーバート大學から持ち歸つたのを折衷して拵へたものである。以前の生徒は方々の學校を経て來て居るから、高等中學の生徒とは言ひ條、三十三歳までの今ならば大學を出て居やうと云ふ年頃の人も偶には有りました。

私が三十九年まで教頭をして居た間には、種々なことに出逢ひました。生徒が何かやると飛沫は毎も校長と教頭と生徒監にかゝるのです。ストオムの始まつたのは明治二十七八年戦役の頃であつた。可なり猛烈を極め、或る時などは病氣の生徒の室内に

闖入して、熱の昂進して居る生徒を虐めた連中があつて非常な問題になつた。近來は追々衰へた話を聞くが、然し未だ締つて居る門を開けないでどうかして遅く歸寮する生徒が多いと云ふ話を聞いたが、校風問題の喧しい今日、那麼事は止して呉れ、ば宜いと思つて居る。

今こそ端艇部、野球部の聲名は擧らぬが、一時は非常に鳴らしたものであつた。近來は私達の様な同じ學校の床を續けて踏んで來た者には判然と境界が分らぬが、洋服が廢つて和服が多くなり、和服も以前は破れた羽織などを着込んだ所謂弊衣破帽連が跋扈して居たが、近來はズツと小ザツバリした人物が多くなつた様に思へる。之等は時勢の然らしめる處で却つて結構なことである。ワザツト破れた着物でてらふより自然である。元來、もとの木下校長が制服などどうでもいゝ主義の人だつたので、和服黨の殖えたのも其の邊の事情でない歟。

木下氏の主義は、生徒を訓育して『男らしい人物』を作り、狩野校長の主義方針は



「學者らしい人物」をつくるに云ふ點——その理想の下に動いて居られた様に思ふ。あゝ十年又た二十年、茫乎として夢の如し。

行軍には私も屢々行つた。板橋の先の白子の宿へ一泊行軍をしたのが濫觴で、それから年々恒例として行つて居た。以前は今の様に體操主任が講評をせずに、士官學校の大尉とか少佐とか云ふ人達を頼んで居たが、二十七八年の頃軍人が拂底になつて止むを得ず、千葉縣鴻の臺教導團の某教官に依頼した。其の時同地まで出向いて一戰さ濟ませ其の夜野營中に宿の前に歩哨を立て、人を誰何してると、運悪く陸軍の連中に打つかり、誰何の權利があるとか無いとか、どこの結局血氣の一高生は軍人方を毆つた。それから大騒動で双方多少の負傷者もあつたが、頼んだ審判官の教官が双方をなだめ「何も悪氣で誰何をしたのではない、軍事に熱心のあまりにツイ行つたのだ」と某將軍の辯護もあり、先づ先づ無事に落着いたが、一時はごうなる事かと思つた。當時は一泊五十錢位の費用で濟んだが、今日は大抵一圓五十錢位はかゝる様になつた。

世間が變れば生徒が變るそりや無理のない話であらう——

一六、追記

一 高の生活は、今や正に天下に知れ互つた。「生活」に關した記事を本書より取り去つたのは、冗文字を略くの意である。一高の現在は太平無事だ、瀬戸さんの位置も無論安泰である。瀬戸校長に向つて時々議論を吹きかける様な人があると云ふ事であるが、或る者は軽く受け流し或る者は之れを説破して倦まぬ。校長學の修業も大體終つた頃である。教授保田、鹽谷氏等四氏の勤績祝賀會は前年催された。評判記に現れた諸教授も多く無事である。丸山さんは洋行をして色揚げをして來た。新しい教授には獨語の大津康、化學の先生として飯盛里安博士、上村清延、大島正徳諸氏が加はり、先頃佛語の太宰施門氏も教授の員に加はつた。

高等學校の試験は綜合制に改まり、更に復舊した、依然志望者は多い。第一志望にする者丈けが入れたのである。一高に入つたのを秀才の折紙付として誇りがに振舞ふ



ことは、今後一層その風が甚しいであらう。一高出が必らずいゝとも定まらず、萬事は、その個人本位に云はねばならぬのであるが、一高そのものへ對する定義を下す場合には、非凡の秀才も出る代りに、頗る付の非常識者も出る所と云つたが當つて居るかも知れない。

一高は依然皆寄宿制であるが、寄宿を嫌ふ者も相變らず多い、然し、それは皆寄宿を時代に適合せぬものとして排斥するならば餘りに早計だ。出る者も多い代りに、必要を感じて入る者も多い筈である。

削除一五項。

## 第一高等學校

### 一、仙臺市の適應性

仙臺の地たるや西北に山嶺を負ひ、東南は海洋に面し中間田野大に開け、邸宅地樹木多く郊外の道路松林連り、夏は以て炎暑を避け冬は能く寒風を防ぎ、其の形勢位置最も宜きを得たり、故に華氏寒暖計極炎暑にして九十二三度より九十四五度に上り、沍寒の日にして三十四五度なり、之を平均して常に五六十度の間を昇降す、寒暖中和を得風雨時に隨ひ、土地沃饒にして五穀蔬菜能く成熟し地質乾燥卑濕の憂ひなく、飲料水は一般井泉を用ひ其の水清淨淡白にして健康に適し衛生に宜し、廣瀨の急流は運河の便なきも四つ谷六合七合等の支流を設け能く疏通して、以て宮城名取四十萬石餘の耕土に灌ぐ、他の河流も亦然り、仙臺市を距る二里にして蒲生の津あり三里にして閉上港あり、四里にして鹽竈の良港あり五里にして荒濱港あり、七里にして松島灣あり十三里にして石の巻港あり、佳港良灣に乏しからず皆共に運送に便なり、況や道路平坦四通五達何れに行きとして車駕の便ならざる無きに於ておや、他の六縣の或は山谷の間に都會して海港遠く、或は北海の濱に僻在して冬時海陸の便を缺く如きは、皆通運

第二高等學校



の便必ず仙臺に取らざるを得ず、六縣の貨物必ず先づ仙臺に輻輳す、加之近來鐵路汽車の布設ありて京仙百里の長程一日に來往す、是を以て當地繁華日に月に隆盛を極む、眞に仙臺は天府の地なり。

仙臺案内には、恁う書いてある。

第二高等學校はその仙臺にある、一高に次いで歴史の古い學校である、一高の形式を模して居る所が多い、聞く所によると第三以下各學校は別に教授服と云ふもの、制定も見ないが、一高と二高とは千頭清臣氏が英國より齎し還つて其れに多小の考案を加へた、裁判官の着さうな廣袖の教授服を纏つて居る。一高には自治寮がある、二高には明善寮がある、一高には校内に寮舎をおき、二高は校外に置くそれだけの差である自治の精神に於て同じ、一高に岩元先生がある如く、二高には栗野先生がある、酒を嗜む事に於て酷似する、岩元先生は粗放であるが栗野先生は常識的である、生徒を可愛がる——生徒の慕しがる事に於て結果が同じい、一高に畔柳教授あり二校に杉谷教授あり、兩者共に辯論部長にして、共に眞面目なる其の點までが如何にも符節を合

するが如くである。

予は猶、第二高等學校生活の上に筆を下すに當り學校市としての仙臺市なる一項目を加へ度い。

世に學校市なる都市がある、日本にも其の類が尠くない。吾人は學校市の名目を（學校のある爲めに存在が一層明白となつて居る都市）と、斯う解し度いのであるが全國中北海道の札幌、陸前の仙臺、東京、名古屋、京都、大阪、奈良、岡山、廣島、福岡、熊本、鹿兒島などを擧ぐべきだ。然し前記の各都市を以て全部を學校市とする事は出來ぬ、商業が主格となつて居る大阪など當然此の埒外に措くべきもの、比較的商業盛ならぬ京都市とか、仙臺を以て此の名稱の下に當て簞め度い就中京都市は神社佛閣と京都大學其の他の學校で著名である。仙臺は第二高等學校、東北大學其他、學校と第二師團を以て著れて居る、悪く云へば京都はお寺とお宮と學校を喰ひ物とし、仙臺は學校と兵營を喰ひ物として居るのだとも云へるのである。



論より證據、その数の多いこと。東北帝國大學理科大學、醫科大學、工科専門部第二高等學校、私學としては京都の同志社と對立する東北學院、高等専門教育機關は以上で、教員養成所、市立商業、縣立及市立工業、中學校には縣立一中、縣立二中、東北中學、東北學院普通部、曹洞宗第二中學、松柏塾、女學校では縣立第一、第二高等女學校をはじめ、市立仙臺、私立東華、私立宮城、私立尚綱各高等女學校、女子職業、松操學校、柳絮學校、東環女學校、自助館擧げ來つて其の數二十四五に達し、生徒百五十人内外の私塾をも集め得ば夥しき數に達する、以上の數を仙臺の十萬以内の人口と比較して見る時は人口に比して學校の數生徒の數が意外に多い事を發見するのである。其の他宮城農學校や仙臺地方幼年學校である。

學校市としての仙臺、學府としての仙臺は眼前に偽らざる證據を現した、宮城、福島、岩手、青森、山形、秋田各縣のみならず、北海道やら東京からも多數の學生が仙臺に流れ込んで居る。

名掛町の停車場に下りて、稍右したらば大道が東より西に向つて仙臺市中を貫いたのを見る。道は名掛町、新傳馬町、大町を経て廣瀨川の大橋になる、橋を渡つた向ふが第二師團で左へ曲ると青葉城の天主臺、其の天主臺に上つて景色を見ると云はゞ月並、兎に角仙臺に遊んだ人は此の天主臺に上り仙臺市と云ふ都會が如何發展して行くかを俯瞰するも興味ある事であらう。

仙臺は案内記に見える程の理想郷ではない、然し學問のしどころ、勉強する土地としては格好のものではあるまいか、地勢は案内記の説く如く、上野から出た瀛車が奥羽本線と常磐線とも、一度岩沼で合して仙臺に停車する、海は近い。

天主臺から見下ろすとピカ／＼光つて流れる川に添ふて赤塗りの建物があるそれが新築の理科大學である、醫科大學はすつと離れて建物は白い、其の隣りに燦んだ色の建物が第二高等學校、垣一ツ距て、工學専門部を見る、天主臺の左りに七ツ森が見え、右にコンモリと茂つた森は瑞鳳殿で伊達家の墓所、稍距て、愛宕山がある、愛宕



山より少し高い山が大年寺山なり、仙臺市には青葉が多い、青葉城から青葉の多い町を臨む、月の夜此の高地に上つて市中を俯瞰するも面白い。

将来の仙臺市は、現在の理科大學醫學科大學に併せ工學専門部の他に新設の工科大學を併せ三分科大學が現出する、豫算も通過して居るし、理科大學に附屬せしめた應用化學科に一二學科を加へたる工科大學と、東西兩大學と稍意味を異にする法科の設置も目安の内に入れて置かねばならない。(但し名稱は學部となる)

仙臺市マイナス學校及び兵營、そしたら何が残るだらう、政岡の出た土地と云ふ古い歴史である。政宗公の墓である、三好前第二高等學校長曰く『將來の仙臺は獨逸のライプツヒと同じ位置でなければならぬ』と  
學校市としての仙臺は語の適當なるを覺える。

二、不便利なる學校

明治三十三年四月以降十二年の久しきに亘り校長をつとめた中川元氏は、四十四年

の一月人材缺乏と云ふ處から遂に其の位置を捨て、中川謙二郎校長の東京女子高師校長に去つた空椅子を填めに仙臺高等工業學校に行つた。從來教頭たり生徒監たり三好文學士は年功を以て其の後を襲ふた、兎も角、その後の中川元氏の位置は得意でなかつた。出校すれば書類に官判を捺す丈の仕事ながら病氣と稱して引き籠り、書類は大抵東四番町の自宅でカタをつけて居た、その内に學校は東北帝國大學に附屬して工學専門部となり、中川氏は自然廢官となり間もなく死亡した。氣の毒な次第である中川謙二郎氏もお茶の水を去つた、三好氏は皇子傳育官長に轉じて大宮人となり、その跡釜には教頭の武藤虎太氏が座つた。三好氏は近頃死去した。八年の日子には可なりいろくの出來事がある。

今日まで第二高等學校の校長は大分變つた、十九年四月中學校令發布二十年四月創設せられ、當時の校長は文部參事官吉村寅太郎氏で二十四年十月に開校した當時の學生は未だ尠かつた、明治二十五年の卒業生はたゞの十名に過ぎなかつた。



其の後、次第に數を増し三十年には百三名に上り、三十六年には百七十五名の卒業生を出し、四十三年卒業生までを併せて二千八百八十三名、出身者に博士が十四名、其の人々は法學博士河津暹、醫學博士三宅鑛一、同二木謙三、同田中友治、藥學博士馬越孝次郎、同雨宮藤吉、文學博士福來友吉、理學博士新城新藏、同日下部四郎太、同遠藤吉三郎、同池田岩治、同飯塚啓、それに新博士の戸直藏諸氏、故文學博士高山林次郎氏は一部二十六年の卒業生であつた、猶近く博士たらんとして居る人は數多い。(最新の分略す)

二十七年五月、第二高等學校となり、三十年四月に、澤柳政太郎氏校長として來任した、澤柳氏來任時代には一寸面白い話もあるが、預る。三十一年七月第一高等學校長に轉任した氏の跡に、菊池謙二郎氏校長に任せられ三十三年四月まで其の任に在つた三十三年四月中川元氏が第五高等學校長より轉任し來つて今年まで十二ヶ年の永き校長として在つた三好愛吉氏は都合五代目武藤校長は六代目の校長さんである。

學校は市内片平町にある、頗る付の汚ない學校だ。廣瀬川に面した校門を入り玄關に入ると馨が下げてある、燻んだ色の建物のダツ廣い玄關で其の馨を氣恥かしい思ひでカンカンと叩くと漸くに小使が出て來る。或る奥さまが少し用事があつて或る日此の玄關に起ち例の如く馨をならし居ると小使は出て來ずに生徒がズラリと廊下に並んで見物したので、顔から火が出る思がしたとの述懐、全く此校の構造は悪い、玄關の脇に小使室があるだらうと思ふと其れは間違ひ、すぐ取り付きの室は教授室である、黒い服の先生が参考書を抱へて出入するきり、受付のウの字もない、受付と小使部屋は右手の廊下つゞきの一棟にあり、勝手がわからぬ爲め赤恥をかく事がある。

敷地面積一萬九千八百五十五坪八合三勺、其の内建坪二千五百二十四坪六合四勺、建物の本館、物理及び博物室、化學室、講堂、圖畫測量室、教室、雨天體操場及び銃器室、元寄宿舎等に分れ、校長室も教頭及び幹事室も元寄宿舎にある。建物が狹隘な爲めに元寄宿舎の方に博物、地質鑛物室、圖書館までも置かれてある聊か虐待の氣味



だ。

第二高等學校を説く序を以て前校長故三好愛吉氏の人物と、前々校長故中川元氏の人物を併せ説かう。現校長武藤氏は熊本の人、二十八年の國史科出で、以前は五校の教授であつた。たしか四十年に來任したので、人物は規帳面すぎる方だ。

三、中川氏と三好氏

中川元氏を魚釣り校長と呼んで居た理由は、氏が悠々として太分望を氣取るからの話である、松島の海、廣瀬川の淵は中川氏の繩張りである。校務の餘暇釣りを垂れて楽しむ事年あり、人、中川氏の門を叩かば其の歸るに際して幾分釣魚の趣味を鼓吹されるであらう、遂に不幸にして魚釣り校長としての事實を見ず、氣焔と實際との比較果して如何なりし。

中川氏は然し普通の釣り好きと同一視する譯に行かぬ。釣りを通じて海洋其の物に興味を有し、佛文の海洋學を日本文に譯し出版する筈であつたこの事だ、數百頁の浩

澣なる大冊と云ふ、魚釣り校長の名、亦た空しからずである。

三好愛吉氏は越後村上藩に生れた、大學の哲學科を出た人で佛道家である、仙臺人士は氏を呼ぶに和尚さんと云ひ、もし立ち入つて前垂れ教頭と云つた、前垂れ教頭は前垂れ校長となつてから、皇子傳育官長になつて行つた。豈夫その時も毛縹子の前垂ではなかつたらう、前垂れ校長の綽名は繕はぬ服装に、餘り美しからぬ毛縹子の前垂れをぬめて居たからである、其の眼は睡む相な眼である、天神鬚——或る人は朝鮮鬚と云つた——は房々と其の顔の下半部をかくして居る。

頬から下に黒い鬚の多い三好氏の頭は、一毛も残さぬ禿げ方である、或ひは下あごの鬚の方に頭の精分を吸ひ取られたのでは無いかこの説があるが、其れは疑問である漢文の瀧川(龜太郎)教授も同じく非常な禿頭である、口善惡なき二高の學生は兩先生を禿頭界の双壁、又は禿頭界の二幅對と稱して居た。

某日、講堂で雄辯會の終りに晚餐を共にした、其の時廣い室に暗い電燈一つしか無



くて、飯を喰ふに鼻の穴へ突つ込む程くらかつた、口の善くない某生嘆息して曰く、『恚う云ふ時、瀧川先生か三好先生が来られるといふになあ。』

三好前校長は生徒をよく愛する人であつた、先の清水小路の家に移つたのにも面白い譯があつた、明善寮の隣りの家では毎朝、寮の二階から下を見下ろされるので先に住んだ人はいやがつて皆移轉してしまふ、持主が困つて居たから三好氏が持ち前の道樂氣で、

『よし、寮生が見下ろすなら、此方を見上げてやれ、睨めつこの競争だ』

と移轉していつたこの話である、寮生に眺められるので人が落ちつかず、随て家賃も廉かつたので其處を見こして移轉したと言ふ人があるが、それはどうだかしらない。

#### 四、兩高校の類似點

三好前校長四十四年春、最初の校長振りをして高等學校校長會議を終へた其の足で各高等學校を視察した。金澤の第四丈は甚しく寄り道になるからとて略し、九州

の果まで隈なく視察して來た。歸來こんな話をした。

『仙臺だつて捨てたものでないよ。』

物は放れて見て、はじめて真相をしる事が出来るのと、近寄つて其の真相をしるものがある。學校當事者など、放れて見て真相を知る前者であらう、此の旅行は幾多の効果を齎したものの如く見える、他と比較して長を採り短を捨つると云ふが、月並なる文句ながら眞理である。三好氏が『他所を見て氣強くなつた』

と云ふのも蓋し事實であらう。

所變れば品變る、三好氏の曰ふ所では、第二高等學校と相似たるものは第五高等學校であるさうな、學生氣質から周圍の状態から、國風の淳朴な點から欣慕すべきものと語つた、彼れのバツテンクサイ、此れのドウシテクナイ共に尊敬すべきものであると。

第七高等學校造士館は鹿兒島に在る、三好氏の談に曰く、鹿兒島は十年の亂の時夥